子孫寳草

全

ロ9
1346

仁9 門 號 1346 巻

此書を見て童子舎弟まで學問修行すべき力なき人も自然に悪を
このむことなくして善事を志し後の子孫に至るまで聖賢の旨をこのむ事譬ば甚だ
薬種の灸を用ひて朝夕飲食を生じ病を治して長寿をたもつがごとし
其書は俗書双紙のたぐひなれども忠孝の道は達人の知ることなれど愚人も是非の分ちを知るなれば
なれば彼の子孫に黄金萬貫を遺さんよりは一巻の書を残すにはしかじとこれを書きしるしてひろく世に伝へるものなり

子孫實草　全

朝夕に見るや黄金の花咲くも
子孫をかも何世の実と知る
莫頼

東都　伊藤氏藏板

原序

光陰ノ移リ易キヲ觀スルニ越方ノアヤマリ來レル身ノ愚サハ數テモ餘アリ壯年遙ニ隔リシニ驚キ過テハ改ルニ憚ルベカラズト思ヒ文盲ノ躓ヌ杖トモナレカシト霖雨ノ淋シキ砌机ニ向ヒ聖賢ノ金言佳句ヲ集テ自身ノ箴トシ又ハ子孫ノ愚ナルヲ諫メンガ為ニ編リ敢テ他見ノ為ナラザレバ文章ノ拙ヲモ憚ラズ事ノ紕ルニモ怖レズ見ルニ順ヒ思ヒ出ルニ任セ筆鋒ニ

神田旅籠町壹丁目 番地 三河屋幸三郎

和ゲ唯庾幾スル處ハ百句ヲ閲テ乃至一句ヲモ守ラバ
得益ナキニハアラシト思ヒ愚蒙イサメ草ト題シテ
反故ノ裏ニ草案ス笑草ナガラ心友ニ見セヌレバ
童蒙ノ耳ヘ入易ク淺ヲ知テ深ヲ慕助縁ニモナラント
イサメシ詞ニ引レテ筆ヲ染テ清書ス他日後覽ノ
人アラバ一嘲ヲ止テ添削ヲ仰而巳

寶永三歳戌孟夏

昇平の徳澤に浴し。飽まで喰ひ暖に着ながら。
皆先祖父母の恵なる事を忘れ。逸居して禽獣に
ちかきことをのがれがたし。行ひて餘力あれば
聖賢の書をよんでも是を行ふ中に其志しれかし童蒙
誰ともやすからず思ふ。よし俗人も諸人を
教へしかれば草紙の書。其意味乃せりたる紙
感じざるもあるゆゑに。其要の文をえらびて梓に
のぼせ永く傳へ人の思ふに。何と名はさまざまと机に

者をのこゝろかけし折なし。義ま子孫もきし無を
給ふ。此草紙を一覧し。諸也の書物子孫へ
傳ふるに千金にも換まさるの宝なりと云
給ひしを。其まゝ号られて子孫宝草と云し。
梓校會を經ずして侍ること年しきむ

文化十三年丙子秌

伊藤芳脩謹誌

子孫寳草

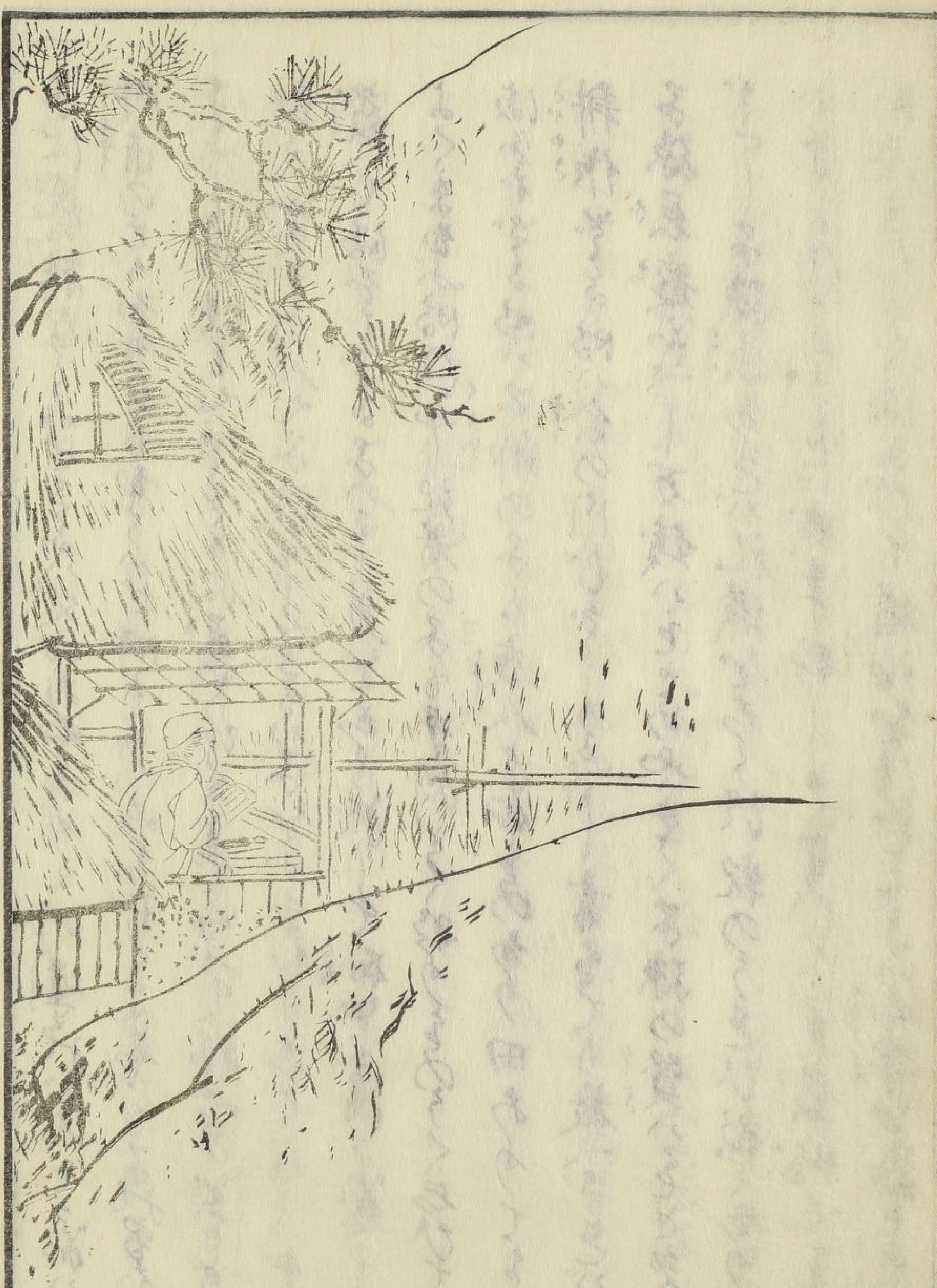
一 千巻万巻の書を見ても千句万句の理を聞ても其理を守らざる
身持ならぬ時ハ無益の事なり学問する事ハ身のおこなひ
志をたゞさんがためなれバ一句一言の理を守てもよく道理を合点して
行ふる時ハ其理よくかなひ一切の事へわたりてよし

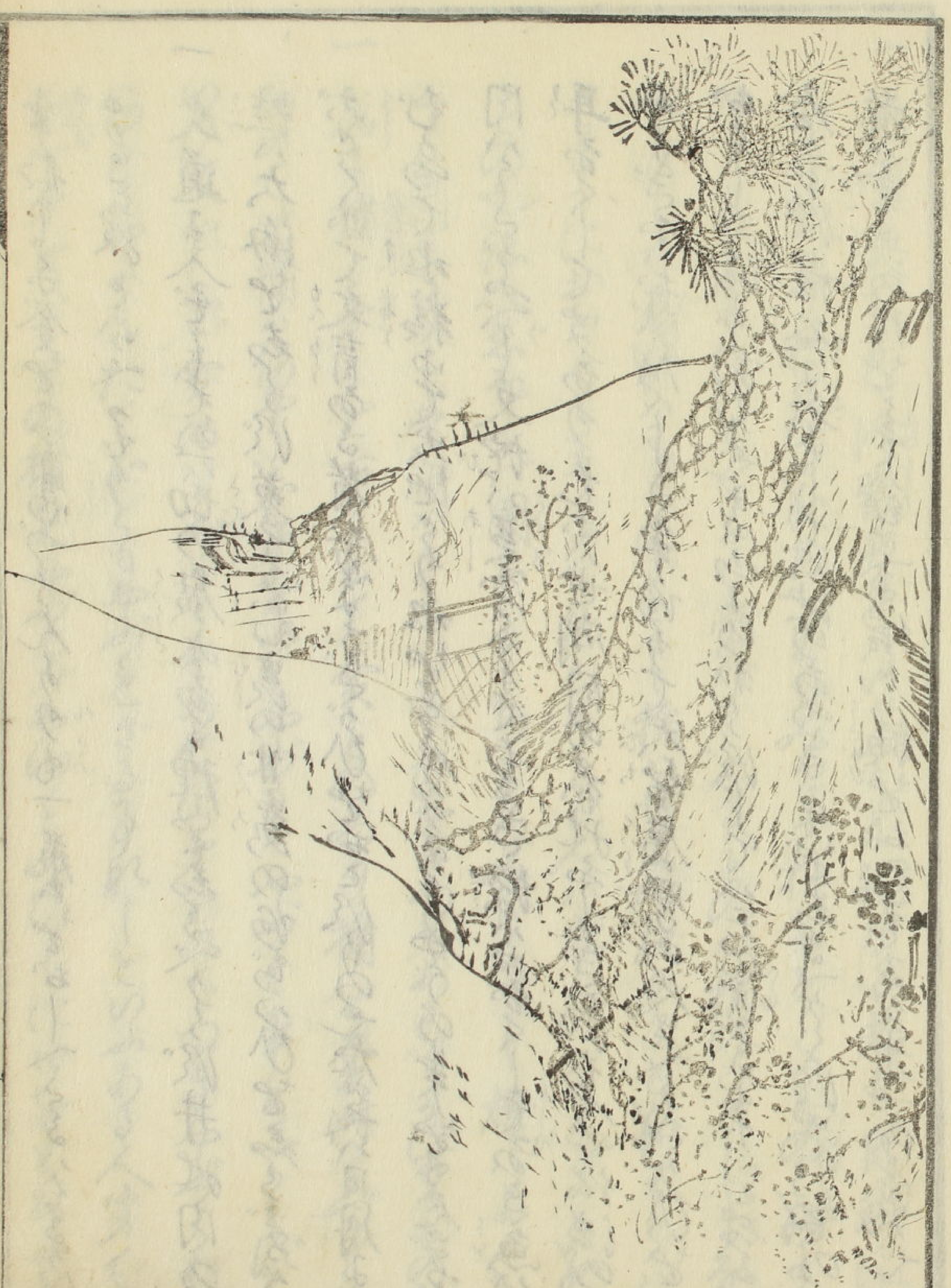
一 何者の芸人も夫々其の芸の是非をもと志時ハ
学問も成べし又後世の修行も我成之是を以て知るべし
主人もなき人の隙なきといふハ志のなき也怠りなる心を以バ智者ハ
日のくらしかねたまひへあるも却しけどもて日をくらしを楽とハせざる
なり只学問して義理をよくわきまへてんの内に欽楽とも

一 人のたとへ見持つきるの八書籍之子孫へゆづらんにも見に徳しる

学ざる有べからず書を読時ハいつも能く心を記て見るなり心をきて
見ざれバ自然に文字も覚ゆる徳あり文字を覚えぬ者ハ義理を
知らざる義理知れバ志誠の道に入ん心も志がらに身もおさまり
家もおさまりて仁義礼智信の五常をよく読とるべし又ハ仏法の
五戒ハまもりて功徳となり未来も善果に至るべし是皆書を
やと覚えしゆえとなりて二世の徳ありそのもとみなまもりて八宗
をさまる事なし然れども貧家にてハいとひ出しがたき大分なれ
書ハもとめがたし一巻二巻にても勇猛の用心と成なと書を
求め座右に見べし南容と云し人ハ白圭の詩を毎日三度づつ
諷吟して法しまされるとなりたる書にいそくまなんの掟となり
居るなり八一句三句なりとも書て机のかたハらに置又ハ立居に見
るべき所に張り置くんをいましむべしとぞ

一子に藝能なきハせざるハ父のあやまりなり訓導をおろそかにするハ
師道のとがなり父もおしへせ師もよくみちびくにさとくも子なる習ん
ざるハ子の法を之わくろに志てわくまでらなそ称なりそとを
むるハ賢才の人の子にして入ざるハ子をふかむに志をなからぞ
教へて読ざる子ハ己が身を志らだしく恥をまなく成べし
よくまなぶ時ハいやし卑賤の子も学川とく能あらぬく思ひて
読まざる時ハ公卿の子も愚人となる其田あそてを
耕作せざる時ハ倉の内むなしかるべし書ありても教へざれバ
子孫愚痴なるべし万錢ハもとめやすく子孫の賢ハもとめ
がたし子孫愚なれバ礼儀をしらず親のたもひ教くなり
小事も法をなさざれバ成事能しよく習ひてこそ数明とも
ならざるよく読まびて道徳を法むときハ凶邪なともおそるる





乗れし千金を子にゆづらんよりも一藝をおしへよとあるハそるにかたに
あのさ教といへり

一 文道に入ずしてハ一切の廣大なる理をしるべからず井の内の
蛙ハ大海をしらず蓼をはむ虫の甘露のあぢはひをしらざるが
ごとくにて文盲なる者ハ方々にまよひをおこし此のたとへバ日月に
むかつて水精にて火をとり水をとる事をしらざるの事をもしらざる
内ハかるがるべし又蛇ハ足なくしてあるき蝉ハ口なくして鳴き魚ハ
耳なくして聞なり是等ハ世間目の前なるふしぎなれどもいづれも仏法の
ふしぎにおよびがたくしき事にかりて大智廣学の人さへうたがひを
おこして深よふかきどしまる山よりのぼらずしてハ天のたかき事をしる
居ながら深谷に入ずしてハ地のあつき事をしるべからず只小智の
者ハ書典の理をえてハむとくに信じ疑をおこさざるが第一の事なり

一 学問に入てよく修習せざれバいかほど鈍なる者も自然に
ち恵ひかりの利發になれども玉もみがかざれバひかりなきものとなす
なし或る書にいはくよく学びてしるものハ稲のごとしまな
ばずして愚なるものハ蓬のごとし稲ハ世上のたからとなるものなり蓬ハ
あるかにおとりなりよく物知りたる人ハ世上のたからとなり
そのうへ法人愚なれバ國土ハたちまちみだるべし燈ハよく
くらきをてらし学問ハよく心のまよひをさつてあきらかに告るものなり

一 商に楯と矛とを市に出て賣ものあり楯を賣時ハいづれ
かめて此楯ハ何なる矛をもつてつくともつらぬくべからずと
いひ又矛を賣時ハいづかめて此矛をもつてつくに
何なるかたきをたてぬともつらぬかざるなしといふある人尖て
汝が矛をもつてその楯をつかバいかんといひしに口をとぢて

こゝへぞ是を自業相違といふなりける也よまよはんとせるいつはり
なき也是をはなしてよく調のちがひあり総じていつはりなる事を
いふ人ハ何程上手をいひても調の相違ありて其ときすでに
あらはるゝもの也されバいつはる事をバ必ずすまじきものなり

一 主君へハよく忠義をつくすべし一日の主君さへ君臣の義重し
いはんや多年厚恩の主君をやされバ主君ハ親のごとくまた親
ハ主君のごとし親なきものハ大義よりしてハ親子兄弟よりも重き事あり
あやまりし伊尹が太甲をはなちて殷の世を興し周公旦の
成王を補佐して周の世をながくつゞき程嬰杵臼ハ我身を死て
主君のみなし子を世にたて紀信ハ高祖の命にかハつて滎陽に
このこみをとりし和漢主君のために命をすてし人数しらず

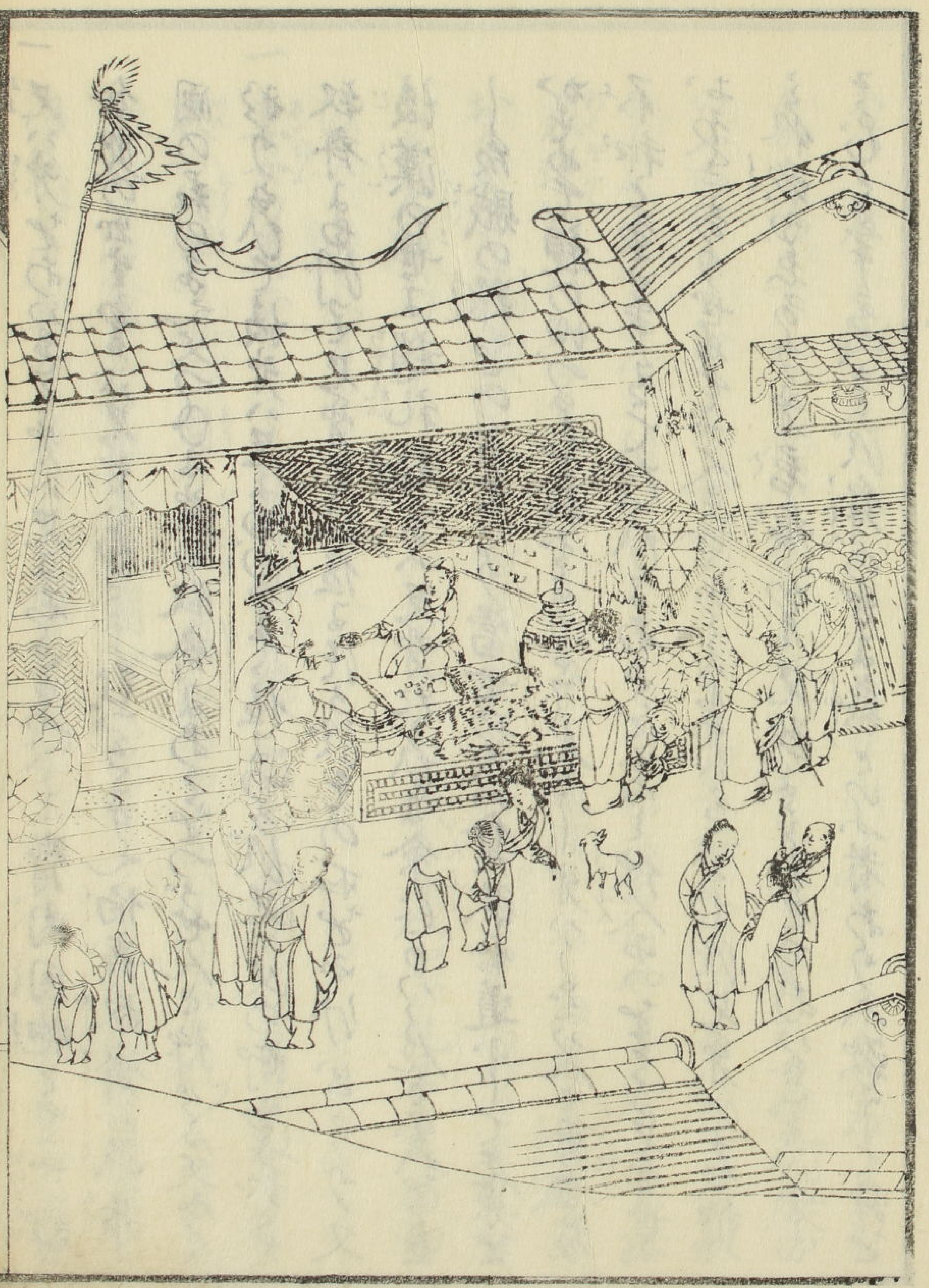
一 親にハよく孝行をつくすべし孝行ハ百行の宗なり今の世に
人ハ愚癡なる親ハ無理をいひかけし孝行なりがたしと思へど至孝の人ハ無理なるとも
是も道理よりてはなしそ瞽瞍ハ愚癡なる親なれど舜をにくみて
あやまちさんとせしかども少しもうらみずしてよく孝行をつくせし
故大孝行の名をはなちて天子となれり又曾子ハ親に大孝の人なり
曾子ハ是をさへ中の孝行なりといふ人の子たる者ハ曾子ほどに孝行
するが職分なりとて大きにハ分めぬハぬ曾子程の孝行の人さへ
中なりといふハ今の世に中分よりゆるる孝行ハいかばかりなる又親の
ちからよわき杖にそうたがひなるべし大なる杖にてうたんといふときハ
にげるを礼なりと孔子ハをしへ給ひぬ忠臣ハ孝子の門にもとむと
いへり親に孝ある人ハ主君にもこのごとく忠あるものなりと

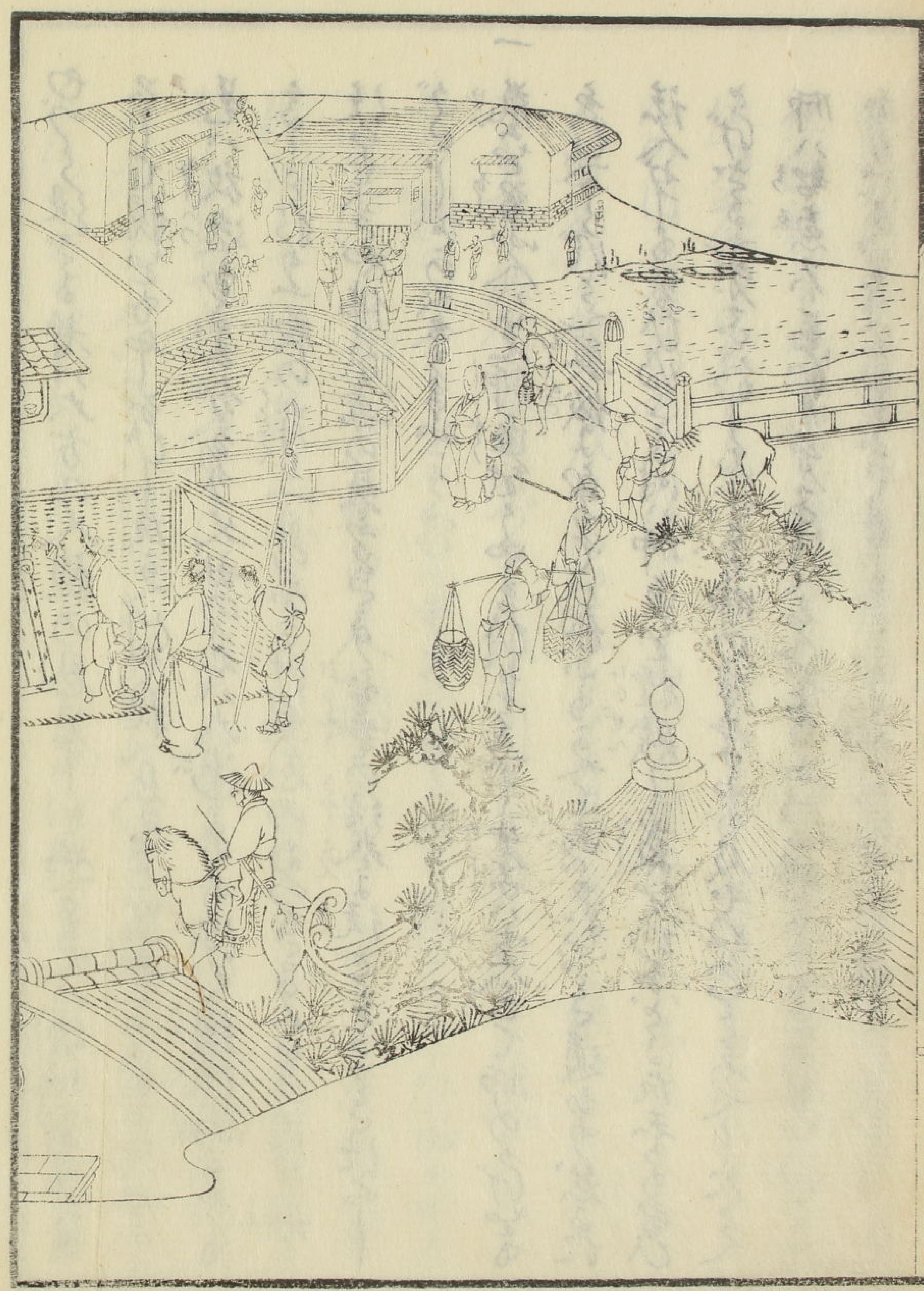
一 親にかゝりて居る身をそこなひ又ハ悪事にて命をうしなる
ことなかれとは大なる孝といはれし身をたて仁道をおこなひて我名をあげて

親の名をあらはすを第一の孝行なりとしるべし親をはづかしめずして
他人の親をうやまふをば悖礼といふ子を愛する心をもつて親に
仕へば孝行の名をとるべし又人目にはさのみ孝行と見えずして
心の内に孝行のこゝろざし厚き者あり人は知らずといへども
天道是を知りたまひてあはれみをたれ給ふ故に親によく孝養
する者は他人へもおのづから礼ありてその親に孝をつくさんと
せず親のいふことをそむかず外へ出る時も親にうかゞひ帰りても
又きかすべし老年の親ある人は遠くゆきてあそぶ事なかれ
親死して後三年も過ざるに親の志をあらたむる事をなげき
あらぬ事して我身をうしなふは大不孝なり一切の罪科の内に
不孝なりといふは死して三界の人をころすよりも父母を
ころすものとこそ見えすぎたるに親より貪欲家督を

おのづから然ざる者は大方の人親の恩は知れりと思へども又は幼少より
父して親をも中をあしく旅立へ出て親へ思ふこともいふやうに世間おほし
是は放逸なる六合なり父母の恩は大海よりも深く須弥山よりも
高しと孝経に一紙の読書に一日のなさけを忘れず一生の内をも謝し
況んやきやう佛は父母の恩を思ひて無量劫の経巻に説とをしへたまへり
心得べしとのべたまふ

一 藝を習ふ人は先師道をうやまひおそるべし弟子は七尺去て師の影をふ
まぬやうにとて奥儀に至りては親にもいはぬ事のむづかしき道なり然るに
法人の習ひ得る時は師道を軽賤し教をあなどる放心を習ひ
とげざるの弟子はかしこく師の中学かも及ばぬ位をしるべしたとへ
師は智恵不足なり弟子は達者で習ふ時は師より上の智を知るその
あだとへば青は藍より出て藍よりも青く氷は水より出て水よりも寒きがごとし





一 兄ハ弟をあはれミ弟ハ兄にしたがふべし骨肉同胞とて一體
分身の出生なれバ兄弟ハしたしむべき事なり伯夷叔齊ハ孤竹
國の君の子也父つひに弟の叔齊にあとをつがせんと仰らるゝ父なく
なりたまひて後弟ハ兄に出づまして位につかしめ兄ハ父の仰なれバとて
叔齊に出川ども兄弟共に位にのぼらずその國をにげ出たり又
後漢の世に趙礼趙孝ハ兄弟たがひに命にのぞんと義をたて
し故賊の難をのがれり當世の人ハ貪欲無道にして兄弟を
かすめて親のゆづりを我ひとりとらんとし弟ハうばはんとする故
不和となる事也てたがひにあらそふを他人よりハまさる兄弟世に
おほきなりせめて二人をくらぶれバ事ハなきへうしろ兄弟の不和ハ
是れ欲心ならびに弟愚癡ゆゑ兄欲にまかせてあはれまバ弟も
そむくまじきなるべしかの舜の弟に象といふ者あり大欲にして舜を

ふ度々殺さんとしけれどもうらみもせずしてよくあはれミしゆゑ
象も終にハ悦び象もまことにしたがひてつゐに有庳と
いふ所の主となされ安樂にして生涯を兄ハおくられけり弟大欲
にして兄をないがしろにし親をうらみてわざはひをまねかむやうにひがみ此
悪逆の者ハやがてつミあらはるゝ道理をしらぬ者ハ禽獣にも
おとれり螻蟻の君臣鴻鴈の兄弟羊ハ跪て乳を
のみ老狐ハつかを首とし忘せぬ礼あり不義なる人をバ孔子も人の面
けだものゝ心とのたまへり

一 妻女の道正しからざれバ國をほろび家をうしなふ事其数多し
殷の紂王の妲己周の幽王の褒姒なりこれハくハしく人の出よ
つたへて見るべし其ほかにも國をうしなひし人あり今世の家を
ほろぼすも妻女多くして同衾にあまるバのちにハ及ばずとも女ハ内を

おさむるが役なりよく正しきを賢女といふべし宋公の婦人は
伯姫といへる貞女なる我が殿に火事出来ければ人々皆にげちりしに
一人の臣下伯姫にとく出よといひければ女の礼義二人の臣
ざれバ夜ハあるかぬ法とて出ずしてつゐにやけ死ぬるひとへに
貞女ハ両夫にまみえずとて入江に身をなげむなしくなり高行と
いふ女ハ鼻をそぎてつゐに二夫に嫁する事なし令女ハ二つの耳を
切李氏ハ臂をたち盧氏ハ目をくじりて志しとなりかやうに
賢女ハ名をたかく末代のかゞみなり仏も夫婦の正しくて家栄えむ
親によく従ふるをバ在家のまさつと知るべし妻ハ智なれバ
夫のまさるひもくあたはずして夫のはしきをバかたしむるをバはか
はし六親をよく和合せしめいやしき夫にてもよく従ひおそ
れて若く見せる家のさかえおとろへハ妻の善悪による物

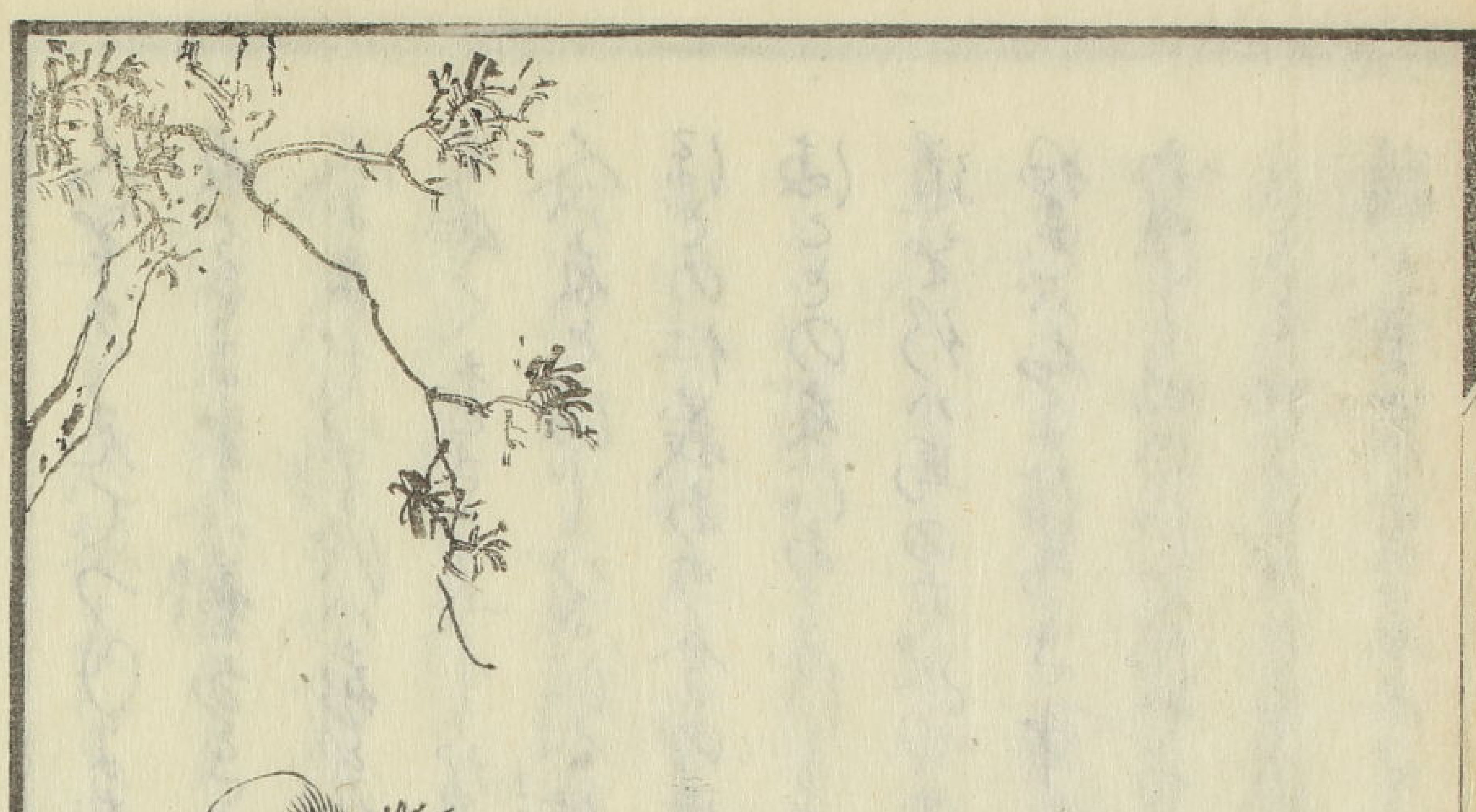
なりある書にいはく己より富る人の娘を妻とせバかならずその
その富貴をたのみにさしはさんで男と夫をかろしめ家ハ奢
りをなし家の中みだれとも知らずして必かたぶくるものなり悪婦妻
なれバ夫もまたいひにおもふ事多しつゐに夫の身を愛すとなり
人中もの多く然ハせ我も卑しくておしもおそるゝ弊なく家
内をみだしものなり貧しくとも夫婦の和睦さへあれバ家まで
うるひおかし夫婦ハ一同に孝行なれバ親の心もたのしきなり
一　女の性ハ皆むかしより拗ねる人我の桐をそのまゝの事をもいふて
斬をあつくなり貪欲をいはしく恥をも忘れ我身を
愛してん人ハ邪見なりいつわり多くして詞をかざりかくし
きらぬ事をもいへバいよいよ叔ハ思ひききうと思へバましきなり
彼でもとハおろかにいひ出したるかのぎる事ハ男のちゑにも

徳ある者も志ある人に見えさるゝ事おほし物の影を
志かれバ又おかしの事も人をうらミ人の噂をいひてつねのかく
さまとし居つかひのはるゝ悪損多く壊べき事にハなまなしても
よハのるべき事にハ我慢をおこし短慮未練にして猶求れ
のんぐ人なきとの之女の性ハかく拙きものなれども女の心
ことにハ女もかしこくとめるは女の位なるなれバ女も位なくば
そのなり松たちけれバ萩も千尋をよづるがおとし

一 女ハあきらかなる鏡にてこの身の善悪を見べし人ハ良友に
身の善悪をいひて志るべし悪友を見て人よりいさむるなり
いかんに悦て其身持をなおさゞる人ハ悪友病を捨て療
治をきらふがごとし又あしきを見ていはざるハ諫の友にて
なべくバ秘友を求めんとおもハバ我よりもまさりしものと

人をよく見てつねにまじハるべし家に似たる人を
友とする事ハ益なきゆへ我ハ其ともより拙き故にまされる
人にまじハれバ家身なれるものなれバ況や我よりもとる友なれバ
志やくきざるべしなきにハさとりてよび初をのたいかにしへの
人ハ友と交じハるに信を尽して朋友にハ命をもおしまぬ
ほどの仁義あり今の世の人ハ面の交じハりなればむつまじくともそれ
交ことの友にあらずして多くハおごと約事ばかりなる故なる
道を求ハ馬の力をつきざる事志るくがごとく久敷友と交じハり
ぬれバんに信なき事志るしなり秘友とまじハるにハ始終かく
あひしはのいを捨てつねにくまれバ老後にいたるを互ひに
うしなハざるなれバ

一 隣ハ貧家にても志かしながら能そのへ恵して金隣をバ志かし



むべし去ぞのひに語勇多き物之家にまさる水ハ迫て火を消す
形し遠判の親類ハ乏き隣ホハおとるなりおほし其のもとども和
合なること能ハ去くなきものゝ一切のつき事ハ必ず隣より縁
まるべしちのくしてたがひに非を去る由ゑそしなわ事なり
両虎二鬪ハいづれもあらそふがおとし

一 家ハ金殿よあらざれども衣服ハ綿よあらざるとも
かてうなれバよし食物ハ珍饌よあらざれども飢をしのぐれバ
よし妻ハ…に色あらざれどもかしこきをとすべし周礼よ曰
貧ホてもんをまるれバつゝに其のしるしひかり富でもんおごりて親子
兄弟夫婦の六親不和なれバ…まらひ多くしてかなしき者之

一 才徳もくなき人の時よあひて高き位よのぼり又小智なる人のさまよ
あらる事をえられハぐつるハいづれもまざいひのもとゐなり

熟して益もなき大事人とかくのでまたあらもなき事なくしらく
一日ゝと日をつひやし藝も時ハ命も危ふし覚へずして老人となる
風しき時ハ魚の水なるを浅よ住みつくがごとく老若をうけて生
くひもなきやうにおもふものな

一 年寄をバ他人なりとも親のごとく敬ひいたはるべき事なるに諸人老人を見てハ
いやしきものとおもひおいぼれたる者よおもひなぶりものとするは誰も老ぬればおなじ事なり若きものを
うるさくおもふものも多く嘲るものあれバ人の生と云ひて必ず笑ふべからず(?)

一 良薬ハ口ニ苦けれども病に利あり忠言ハ耳にさからへども行に利あり
身の行ひよ徳ある人の諫言をバおもひとめて守るべし いかなる
過ちあるとも是ハ常の人の様なく聞て身をなほさるべし(?)
人ともなべし親子でも不義なる事あらバ諫言を加へてらならむべし我も孫子
なければその家…亡ぶといへども…いざる八諫の道よあらざれ

一 欲をバほしいまゝにすべからず欲をほしいまゝにせバ必わざはひ
いたるものなり楽しみをバきはむる事なかれたのしみ極てハ必かなしみ
おこるものなり欲ハおごりよりおこりいかりハ慢心よりおこりわざ
はひハ貧家よりおこり大難ハ小家よりおこり一切の罪科ハ
不仁より起るなり

一 男子にハ稽古をさせたれども女子にハたしなみ教ふる事をいま
だなさで手習ハせ書のたしなみもよませべし幼より髪をゆひ
かく縫なすハせ鋏把截をいさゝかならハすべし事たけしき
時ハ家女をまねのことにして何とあるべきや左様の時ハ乱髪にて見
苦敷ふがいしやうに見え針縫する達者なれバ何様の破も
損じたる所もあるやうに繕ひ此義猶又肝要之幼きうちによく
をしゆるを要とすべし成長してハをしえを守らぬものなり

をしえざれバ木のまがりたるがふとく成てハなをらざるがごとし子を
あはれまバ杖をあたへ子を不便と思ハゞ食をひかゆべし

一 愚者ハすこしも富る時ハたちまち貧なる時の着物をきらひ衣も芸能
つきぬれバ栄耀の着物をまとひすこしも位なきものハ不孝に
むくきをいやしむものなり

一 すこしの物をも置所をさだめて用の時さがさぬやうにすべし又
家内ともあらためて始末せバ人に聞もよろしく人の心に多分につまらバ
失なきものなり家内不通なりとあらそんとあらそふ者なる

一 一言にても理にかなはざる詞ハいふ事なかれ無智の者のいふ
事ハ理にかなはざる故義をかまはる事あれバなきものなり口皓の
いたく詞をもつて人をそしるにいたりてむ事刀もて切がごとし一言
にても慎しむべき事なり詞の多き人をバうとむべからず犬の

たのまれほむるハ悪しきはかりごとし善語ハ一言にても大切に守るべし古の賢人ハ人のもとへ財をバおくらずしてよき詞をおくれりとなんこれ忠ちかき詞をうけたる人喜楽よりも深されて世のしるしとなるゆへ悪き人も人のいましめをいたるまで実にとらしくおもふが道理をいふものゆへこのゆへ小人の志がうつろひみえて我身のことハ誰をもうらみといへるものだいとしたときんも我身にハおもねきまゐていましきをはなれぬ人をいふんをもて我身をせんとぞ我身におもねきさせんをもて人を見べきこと

一 智ある人に近く交じハりぬれバ徳をかうぶらずともかなふる愚人あなどる事なし悪友と交じハる者をバ人おそれて一生をおしていむことのへにたとへバ虎の先へ立て狐を一切のけだものおそるまかだいとし狐ハおそろしからざれバとらの先へわざ由えて

一 墨にちかづくものハ黒くなり賢にちかづく者ハあきらかになり智ある者にちかづく事ハ智恵をましかしこく成者にちかづく事ハ愚人となり智者にちかづけバ賢に成悪人に近付バ功徳を忘れ悪に近付バあしく成り佞人にちかづく事バ虚つくらんおこる之故に悪縁をバいとふべし

一 善ハ山のごとく国にあまたなれども縁なき者ハ見る事なし財ハ何程つみ重なりたれ何方へゆく事も身にあつさがハ尽身につむち恵何方へもよくあつかひゆるものゆへ賢人ハち恵を貴び財をバいとふて漢書にいはく金ハ山深ど掘とるを飢る時ハくらハれず寒き時に着ることならぬものへ菜穀と衣服ハ誠の世の宝也一粒を作る時も農夫の辛労の程をしるべし一縷をおる時も織女の辛労を感ずべし耕作する者なくハ食をうるらず

於し世なるの人生きのひに思ふとい事ハ皆人それ〴〵のわざありて
得たる者もあひにこのひ事をもくるゝ恩義一事ひとつ恩ハ庶生之まづ家
職を第一につとむる人ハ人の恩を報ずるなり

一國政ハ耕作を本とし義を守る人ハ孝行を本とし父母死し
てハかなしむを本とし軍に出てハ勇を本とし家族をもたんと
する者ハ書を讀を本とし病ひをふせぐ事ハ師におふを本と
すべし萬の事本をつとめずして末を論ずるハ愚のいたりなり

一富貴成人の子ならにうまれてもハおのれをわすれず根の事を
本の枝葉もよくおもひハ大風にもまけざるがごとし小さの人も
たうさにうまれハおのれをわすれたとへバ根のあさく入たる木乃
葉をしげらするハ少しの風にも落をるぞかし

一世間の事に過と不及とハ諸人のうへにある事なり家宅よく造りて

家財ハもとより家業ハよくして力ハ惜しく先祖の作善をバ略して
子供の寵愛にハ物を入朝夕の食事にハ肴まで人を馳走せざる
その内大過と不及のなきやうに事をつゝめて費をはぶくべし

一見事書にいはく人の物をかりてこれをかへすべからざるをし
そんじたるをバよくあきなひてこれをかへし借たくハ其かりの恩を
受しその恩をわするハ禽獣の業をなんざするがごとし放逸成
着ハ主がもちをバ大切にし人のこの物をそんじまて返さんとするをも
をまじ又主が物の事にして又人にかし或ハ失なくこれをし又先より
さいそくあるにバ主が物にせんとおもひさいそくあるにバその使に怒
せそこなひし又ハその内らしなひてこれさぬやうにもあることのこれある
このやうの人皆かもちなき無道悪人そのなることのこれ記録に
いひし人ハ書籍をかりても大切にして主のかりもよく返へすべく

この人せし由来誰人もそしまざりしとなり

一 人に悪をなす時はその返報をなすなれば悪をなさるゝ者にあらず
をつるんで悪をなし悪をせし時その者悪を忘ずして返報
をたくらんと相はかり亦をしなさる時はいつとても善行き悪をも志ける
ものなれどもこれも口惜くおもふとも返報をなすは謀の悪なれば
たゞ人に悪をなさぬをもとゝすべし

一 大将の心一言よりたまへば国治り万民ゆたかなりされば乱世
人なきもさるにつけても大将の道る徳は一言とても疎かにする
いへどもまことならねば上悪をこのめば下も悪を好む大将一人の
下知相つらぬる時は万卒ありてよくいへども一言事をあやまりて一国
勤乱するものあやまるゝ一言よりなるしるし君子は九
たびおもひて一たび言ふといへども又小家中にてもまもるべし

家の大将たる者そのかたへ妻子眷属皆々にたくさしてものゝ
一 主君あらば家門皆親子孫まで永く我人の家をもとめて
一 人中にまじはる事は大事のものなれば心をよせしてて人へ親しく礼をなすべし
又人よりあらためて親礼あらば嬉しくおもひてそのこゝろもちをもつくすべし
おとくの心にて悪をかぞへてもへし 拙事かつかへて人をこまらすは我も
とくまさるべし ひとに親のとかくするは万事につきて失多きものなり
一 万の芸の奥儀をきはめたるは只その道に精を入るゝものなり
など碁をうつにもその道にまさりて勝をとる事もなく案じて
おほかた身をも入れ初心のものは碁をうつもまさることなし
かくして手あしをおもふところそのうへのある馬の乗手
馬をよくかけてみるに初心の者の功者
かでもつしさはなしに失のもとゝ初心はそのもとのもとゝ

一唐に韓信といふ智勇をそなへたる兵ありけるが若くして大力之
長き刀をさして道を行しに馬廉といふもの出会ひて汝は長大刀
ぬく程ならバぬくべしさもなくハ我が股をくゞれといひければ
韓信是をきゝながらくゞると見えて勝をあらそはず後ハ
漢の高祖の臣下となり一天に名をあらはしとぞ此時の人ハ是を
大勇にして勇をかくし進退遠慮にあつかる之今の世の人ハ出てむ
だき事にハあらそひ退くべき事にハ出てみだりにさはがす
ぶハあらそひて行べき事にハさらにすゝまず天地自然の道を大事を
あやまつ人ハ是人のまことをあらはす事をよくしらず万人の肩を
これそこのわざをすべし
一つねにハ文書をよめバ聖人にあふて直に指南をうくるがごとし
又そのかくの賢人を友とするにことならず衆人のいふくましいハ

つねに書籍を見て聖賢に親しみなんぞのしめす何の隙
あてゝ世間の人にあふてつひへにこのむることなきや
一少年ハ老やすく学ハなりがたし一寸の光陰もかろくせずして
はひせざるべからず池塘の春草の夢ハ是非におどろかず秋まよんを
つくるべしいかの生れをたへの程しれば後悔せんにあるべし
なにはされバらひのやちまちびのときはあらそふて水の流のごとくぬるなり
一かりそめにもあしきまじはりをせざれバ狂人のまねとて大路を
はしらバ則狂人なり悪人のまねとて人をころさバ悪人なりといへり
いつはりても賢をまなぶを賢といふべし
一富貴なる人ハたゞ他へこぼるゝ物あれバ人の出入ありてにぎやか
なり貧家にある物ハ物ともせずその人貧窮ふかく他よりハ避
道の事にて利銭をとり入金ども人へハ一銭もわたさじと

まゝる事なくひあり。このやうに不義にして富(とめ)る時ハおのれかくしくなさのく子孫ほどく事なし。故に志なくひて人へものをほどこせバ人の出入つよくしてうやまふものゝ富ても慈悲(じひ)なくもバ人うとみて出入すくなし。この人間にくかなるそしるものゝ自然(しぜん)に湯まつき評判(へうばん)せらるゝものゝ范文正公(はんぶんせいこう)といひし人ハ始(はじめ)ハ貧(ひん)なりしが後ハ高官(かうくわん)よのぼり家富しに至り。このやうに富る事ハ先祖(せんそ)の積善(せきぜん)由意なりまた一人うめんハ面目(めんぼく)なしとて一門の人々に田地を買(かひ)あたへあるひハ服薬衣類(いるい)わたあたへらるとなり。今此世の人ハ富るといへども貧(ひん)なる親類(しんるい)ハ同もこの事なく出入する事をさへらるさく苦労なり。富貴なる人貧なる親類の取入ハへつらふていやそ禍へりて後人大切をうしなへ皆そとゝかきそおていかく入居し

一 朱仁軌(しゆじんき)がいへるハ人ハ礼譲(れいじやう)の道をまもりてゆづるを先とすべし。一生の間人に路をゆづるとも百歩までハおよばじ。一生の間畔(くろ)を人にゆづるとも一段までの損(そん)ハなかるべきとなり

一 人ハ隙(ひま)あらバ書をよみて聖教(せいきやう)の理をおしへてもしるやうにたしなむべし。次に手かく事を習ふべし。又算勘(さんかん)も万の理へかゝるものなれバ習ふべし。このやうに善なる事に精(せい)出す人をバいとふ事にゑてる人とハ子を乏しとりてそのかずならぬの芸能(げいのう)へよらずしてかゝるなひとけむしてせんなく月日をくらしハ大悪(あく)の人之弟子ハ

一 多能(たのう)をもつるといへども入用なる習ひをまなびおおせぬほひへあるまじきをなるかるなりとも

一 弟子の事に一々師ハとゞむべし。ましぶる事をバ人に問(と)ふべし。我より年もおとりむちむなき人なりとも道を聞(きく)とまなぶべき

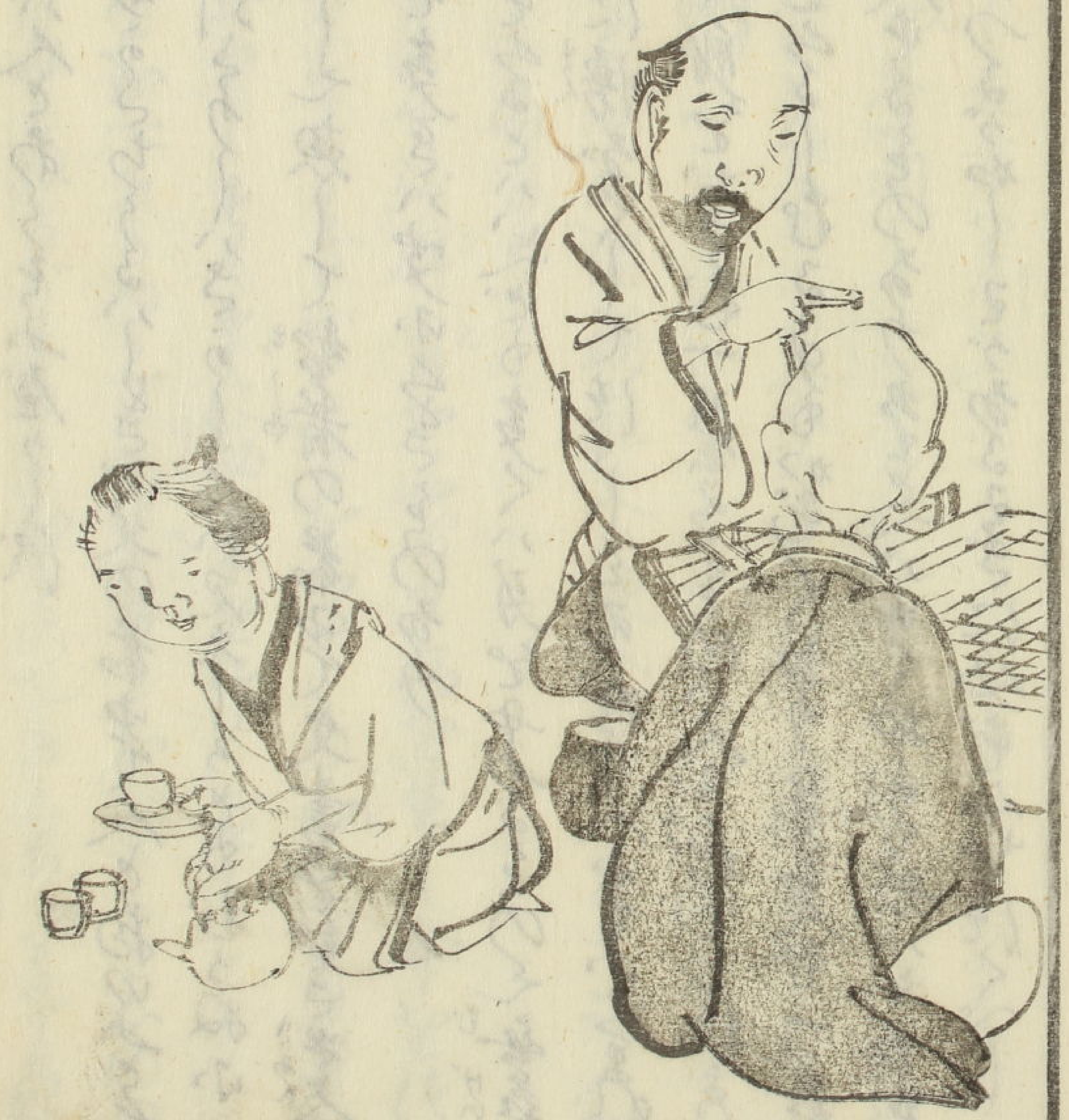
なくバなげかしく云ハんにしてこの道にならひ習ふべし年に前後ハ
よるべからず賤ハ道を師とすべし師にあハざる日ハ書つゞりのうちに
ても疑ひとけぬ事のミ毎月に勤学あらバ一時の学道をもなすといへ共

一 師弟人とあらそいバ其身ハ弟ハまけて人にしたがひくるがよし我
身を達せんといへバ先人を達せしめよと是人をうやまふハ高ぶの
身をうやまふ是人の親をうやまふハ親の敬をうやまふなり人を
この道しむる時ハ又身を苦しむる由忍びをかろしむべからず

一 万のあそび事ニも勝負あるなぐさミにこのむ人ハ己のもて興と
せん事をのミ碁双六もまけてハ無念に思ふものにて己が勝て人に
ほいなく云ハせて我がかんをなぐさめんとする事徳にそむけり
あしき友とあらそふなその友に人をそこなひむきて己が智
恵の浅きかくるを興とする事是又礼にあらず賭ハ興のあやまち

ましてなぐさき恨をむすぶなかだち多し是皆勝負のあそびを
このむ失也人に勝んと云バ道をまなびて勝べし学文をして六
芸をならひ家において位をもすゝめ職をも辞して仁義の道に
入ハ学文の力也是人にこの道ハもして人にすぐるゝハ勝る理なり

一 万にかしこき人の人をそのみて善悪をあらんとするハさうにあるゝ
尽からだまとへバ碁に拙き人の碁打事ぞうかにのしこ見が
碁の尽くる人をみて己が智に及ばぬといひ万事をあれども
事大いなるあやまり熱して人の生まつきにかまぎと知らぬ
まぎれものゝ又習ひしるすにハ功も出習ハぬ事にハいろはからぬ
器用の者もつてのゝる事多きものゝ碁ハ下手にても上手ハ
なるゝにもなくす事何文字の法師暗覚の禅師たがひに
其のかて我が智に及バぬと云なす何事もあるべからず人を



かんしめておのがしる事なりとも智のこのみき之又歌道にもあらバ
習ハぬ事をバ人とあらそふべからず
一 なき人の子孫たるものハしきりに父の前にて人とおなじとて
史書の文を引かハしくハさのしくハ見えしかども亂ぬにハ
おとなりて見えし之熱して智者の前にて文書を読き堂合
前にてくれとぞ多きハ笑止なることなり
一 藝ハ身をたすくるとハいへども多くハ身を出すことの無藝
なることハ身に勝なくして出世して人にもてなされ
一生何事なく朗をおさむ一藝あるものハ人に愚されず
又藝も及身をたるしむる事もかぎりなし若芸人も一藝
ある人必ず浪人せることのあり出世をいへバよく物よく若ハおぼえ
よく藝ある者ハおつるがゆへなるに必ずしんをはこぶべし

一 心ハ鏡のごとし文書を学ぶハさくがごとしんをあきらかに
せんとせバ随分学問してよく〳〵かんがへのうへに道を
聞てもなべよ死をともよしと思ひてまなぶべし根をやしなへバ
枝葉も茂る源をふかくすればながれのきよし根と源ハ心の如し
まがんなくあれバその徳親類又ハ他人へながのまて諸人を
なびかくさする事のなり
一 まがもく飲食にて必脾胃をやぶり病を生し命をほそ
むるものハまがもくまでふくすまをするしあらそひをこのむ者を
そこなふ事おほし事に必ず事をはこぶべし
一 [illegible]するがよき[illegible]
さゞなみぬ時ハ[illegible]
かたき[illegible]一遂て落

つらぬ時ハきハめぬ言が能ととのへ万事のうへにも成徳ある事あり
てんの門までまゐらぬ時ハなどもまる言が出来る事なし

一 人の命三千界の財(ひ)にかへざる所なるといへどもあるは乞食(こつじき)なくとも
命を舎つる事あれば至誠(しせい)丹心(たんしん)の一刻(いつこく)もあさましき舎ことをいひて
其の志あるものハ又死をかろしとし、ふくまバ斬命(ざんめい)の悦びを

一 目くに其のしとも人ハひとのしきを身分
ならしめて命の為のいよいよ命の其のもとをまもれく
あまたく他の物をむさぼる(さい)ハ人に心をつる事多く人に害賊
其のしまざるハ死を恐れざる也恵なり死を恐れざるを
死のちかきをしらぬ也恵なり

一 命をば泰山(たいざん)よりも重く大切(たいせつ)にすべし然(しか)れども時にあたりて
礼のためには身をすつるし義のために命をすつる事ハ鵞毛(がもう)
よりもかろくすべし是仁者(じんしや)のいさみなり

一 世の中に何事でも格式(かくしき)をわれし我ハ人の興(きよう)にせるひつくしきを
詞(ことば)などあやまりもなき人のおくあるそのくわ寄(きう)せ又ハ人をもとひ
ゆくるハならるしきものゝ熱しておしきべ人ハ世なるの人なるへ
多くハおもらぬこそおくぬのくみなるものなり

一 まれ人へ礼なき時ハ人又我に礼なきものゝ人をまもにむかつて無礼
ぬ事あらバまれ人へ礼かくさくると知べし又人より我へ無理(むり)を
いひかけぞまかさ一(いつ)たんわれと徳(とく)このんがおだし人のおに云
無理の内に道理こもりてそのゝ又道理なる事でも無理と
いへバそれいひするなれ又一概(いちがい)に無理なる事なれバいひのゝ家
するもなきことのそその理をもやく守りやそ遠くなき事なれ
みくまくるをかしこき人といへへ渡るハ勝(かつ)の理なればいるハ

六ツの道理をそむかずバ仁の道理なくバよこしまなくるがよし衛(うち)
過(すぎ)たるハまけたるにおとなしくまけをとれバ陰(いん)きハまりて陽(やう)を
生(せう)じ窮(きゆう)まりまつてまけバひるがへしといへるがごとし良将(りやうしやう)ハ
まけるハまけして勝と云事なり愚(おろか)なる者ハ貪着(とんちやく)するハどもに
悪むべし又無礼なるものと思へバそのまゝハ憎みて礼をあつ
くも居し是ハくさき竈(かう)へハ餌(ゑ)をとのへといふ世話のかし
一 下人などのあやまちも度毎(たびごと)にハいましむべからず遠慮(えんりよ)なる
人ハみのがし聞(きく)のがしなさけ深き之ハ川ろくねごとやも心
多し鈍(どん)なるものくせある事ハ一くまが業にあひがくしまず
ともせざる事なきハかんにんすべき事なり気に掛(かけ)ざる
そのハ主人の内をも稀(まれ)なる居しまがんさへよくせへバまが業
にハ入がさしそへしに来てかハざる者を深く学ぶかさんと

もしむつかしき事なりとも才智(さいち)聡明(そうめい)なるものなくバまづ
経文(きやうぶん)よりそ学ぶいくさんや撫文よく勤(つと)むる下人なくバまづ
そをしくに居をほどこすべしその心付なるを時ハ必ず忠節(ちうせつ)
そのこ熟しく賞(しやう)をバあたへくし罰(ばつ)をバゆるくも居し家
いへ王ん頃るべし
一 利口を以て下愚(かぐ)のものをこのをむるハ天理にそむくなりハ
わが身にかへりて語天の照覧(せうらん)をおそれぐまさハひおこ
まで流るものハ身のありがたき日月へあるなれども
流がなくる究の中をバてらし給ハぞ又籬悪(ねと)の水をもあおで
この流をてらしあらぬ人の水ごすをまぬしまく天居にかなる者を
如居し竊(うと)にぬしをかくむ中し続の内ま月なるもやへ乃
みれも見ぞう川ろや

一 及ざる事には我が身の分限を知りて早くとゞまるべし 金銀も
なきを知らずして たとへば貧苦をうけ力も及ばぬ事に精を入れば
遂にかならず病となる 分を知らず思ひて気をなやむは己が身をうしなふ
一切の事何によらず好みて為まじきと思ふ事は早くとゞまるが
身一つの事とゞまらざるは無分別の至りなり たとへば難風に沖中へ
こぎ出したる船のいそへちかづくべきやうに 終は迷惑するなり
わかれざるものなり

一 馬よりおちてかたわとなり又は死せしものの数多しるの力にも
つよき事人の力及ばざれども たとへばこれほどのもので
叶はぬものゝ馬をさへつよき所をよく見 又馬具に
心をつけてのるべし 賢人はあやうき事をさけて
さいへ道橋の如くもあやうき所と見ればおるべし あやうき所を

おそれぬは愚のいたりなり

一 或人のいはく 虚に似たる誠をば知りても語るなかれ 又
まことに似たるうそもまことなきをも語らば此の人
聞し 又智者のいふ事にても義にそむけるをば用ゆるなかれ
愚者のいふ事にても理にあたるをば用ゆべし 義によりて
人によるべからずとはこれなり

一 人にあひする時はその人の用なる事を察して先にいひ好みて
つひへぬ物語をすべし 好みて用をいはんと思はゞ あるひは忘れ
あるひは又よの人事ありていひかくさるゝもあることなり

一 年わかき人は陽気さかんにして あと先の思案なくいさみすゝみ
物に功なくして一切の事にいそぎにちかし 夏の虫の火に入る
あつまりて飛びかゝるごとし ことに若年ゆゑ親よりかたくいましめ人

多くハ身上をそこなふものなり先祖をそこなふ方なくしてまが
はとゝなり又人より悪事をまねきたゞならぬ事多きにいたる
むしろ万事に損ある事多し　おとしき人異見云ても聞ざる人ハ
うはきをやめくして男ぶりのみ好ハ色ある事多しといへども万事
くらのいひわけしさうもなきやうの人身持も異風にして万人並に
ハうにて花麗を好ミ諸ひへなどり多くし女子なぐさみ色ハ目みしく
いへども心ある人ハさげすミて恥かしくいやしくなんごにのしこくハ
わづかなるものゝやうにしてねらるハおやまちなきものゝ
一　方のことがハ口より出るものゝ人のうハさのよしあしをいふべからざ
人の耳ハ心のまゝにつくと思ひ人の眼ハ天よりミると知らく悪心をぬぐ
らむべし　誰も知る儀じと思ふ程そうなるもの　ごとくかも人知るうす
みなとものも天に口なし人をしていハしむると云ことを知るべし　悪事

そしてハ世をへ人あざむくとも諸天の知給ハんハ云ふのしきるもの
熟して悪事にハ日知をまづると云ものハ天にも地中もなど
相手をもたぬ家内も女をすて居し不義なるまじきにあらず
なバよく此心知を知へし又うし儀てきんを持ならバ家来の運も
あしかるべし又なつかしき人ハ人のことはも悪敷いひ人をも
かくらせて叔ゑの人の思ふまゝに事までも人のいひしたふうに
たがるやうらもなくなるものも構ハず世の中とんをくずるがかんなうこ
一　年月の内にハさらくの事出来るものゝ叔そのらをたのむもの
悪をすてよくく案じさだめく吉事なくバ時をのぞさだ
いそぐべしのぞして急ぐハ吉事にハ妨しきをさまりて出来る
ものゝ又すぐに天魔といふわるきバ居るハ末へのぞしてハ
必邪魔入その事ならずして死ものゝ又天よりあたゆる禄を

のぞみして善行にすゝんとすれバ福ハさかへてわざハひハ
遠ざかる事也又ハ悪事を必他へもらすことなかれ事をなす時ハ人を
制しおける時ハ人に制せらるゝといへるがごとし次に悪事出
きたらバ何ほど心を善行に無念無想のごとくおしろく
のぞみ慎しむべきものなりしかれバそのいたり好ハあしく
なりたる業も落つきやすからずしく治るなり又人よりも無理なるを云
このむるとも必まハりのぞみし恥ぬれバその者も退屈しその内
人も理をしらる事なり扨一切の事を名のまへにらちのあくのぬ
浮世と心をしるしわざのぞみし恥時ハ自然と埒もあくことなり
一くんのまへにせんと思へどもその川ろくやがてまはちゝきなり

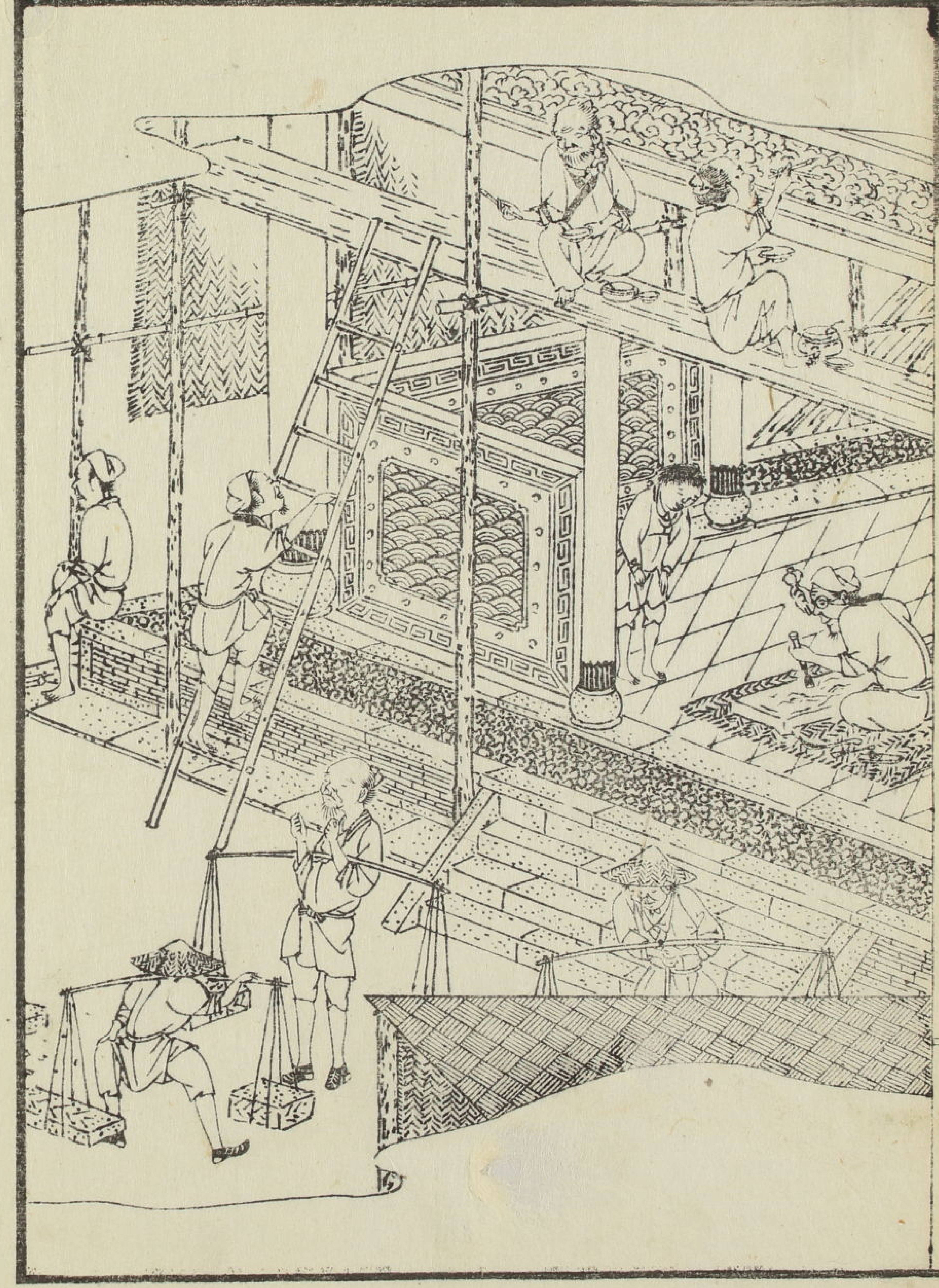
一 貧成者ハすこしよりもよくしてその者ほどの分限になるべしと
願ふ事も万の事不足にせまれてつねによろこびなきことなり

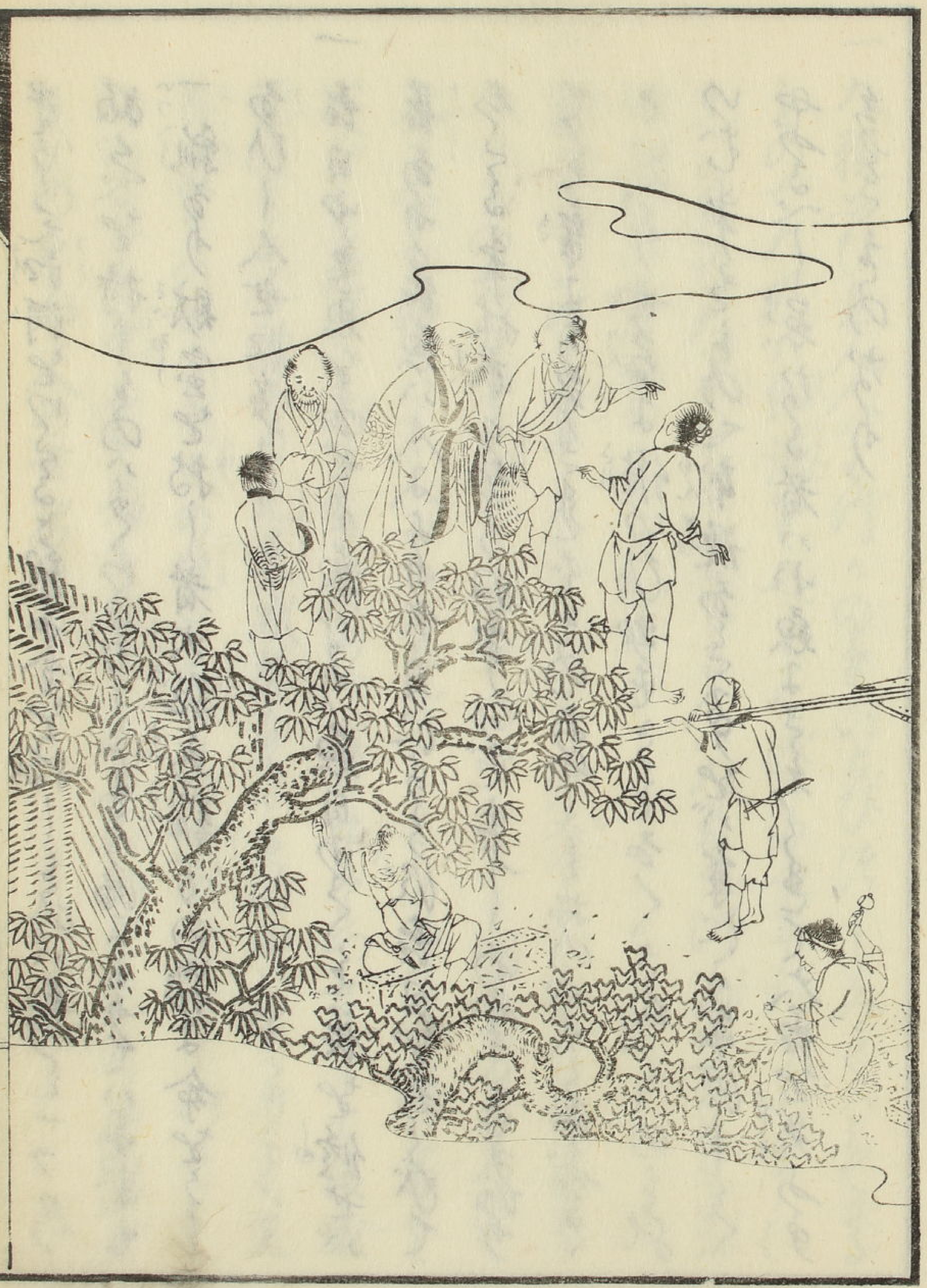
乘ずるか下にくだる時ハよけいなるがごとく一切のあたら
ざる事なくんも其のしれざることなし是よくへんの積ひをとぐ得る
ものなりまづからを志れバつねに気をやすくし人をうらむる事
もなくなきさへよく物の理を志れバ楽天をもうらみず身のつく
なきを志れバ高位をのぞまず職をも辞するまで得らざるハ
智の浅きものなり

一 器用なるハしたがいて分にあまる役を勤る時ハ保よくもるまじき
ことなり又高ぶる時ハつひへを思はざれバまづしくなることなり
威勢ある時ハつゝしまざれバ失ある時よくなるなり一切の事習ハ
ざれハ用の時にこまるなり辞て放埒をすれバさかへくなるなり
達者なる時ハつゝしまざれバやめる時にこまるなりされバ智ある人ハ
末のこのんがへりみきものなりこの心にて悔のなきやうに用心するなり

おろかなる者ハ末のかんがへすこしもなくたゞ目前のとくばかりをよくするなり
一人のあしきをみてハおのれもあしきことを家人にうつしそこなふ
これをバなさずとも人のよしあしハ家業のさまたげになるべし
なかなかさだめして無理をいひて人をそこなへんとするにハ中々むさく
かくせずして無理を以てことなるなりつきもの也いかにそつくなバ
一 いかにて善悪をかくるなかりし智徳ある人の正道にして学徳をそバ
人はことに恭しく礼ありて大臣の人にもおろかにして奢りし人哉
かまひてもうやまはせんとするにハ諸人のこゝろもちにハ時よりさ
ぐべバ是非なく礼をまなびどもしんにハ邪心をさしはさむものなり
一 聖人の書におほくあるにハ下女下臈をつかふるに一芸も家に
まじはらずとおもふ何事にも無調法なるものも一芸づゝある
儲けのまなぶものゝ人あまたつかふにハよく目利をしるべく

その着れぬさきの方へ身ひてはしへバ徳あることあるべし
一 家ハちいさくしてもこれをバよろしく持べしつぎの内に天地我
おさめ一心の内に三寶あり苦楽もこのをさめによるべし栄の
居も心のをさめやうにて金銀楼閣のごとくよく歓楽するを智者
としるなるをふかく思者とし麁食にてもその分限をてらし
清し味なれど飽ぬまでバ粗飯にもとるゝ貧福不常なる
ぞといふハ此道理之
一 うすき多き嶋まで八犬をのけにも忽をはかれ多き嶋
にて八百をもてなすにもつゞけてむまと言へ其一切のもの多き時ハ貴
これど多き時ハまたうるべしさきバ金銀ハ人の身一つにきわまる
然れどももつての道さらにして只むしくやひては八ぬ時ハ尾
積ゆるも捨てるべし法に不足なき義をみて勇でつくる時ハ誠の





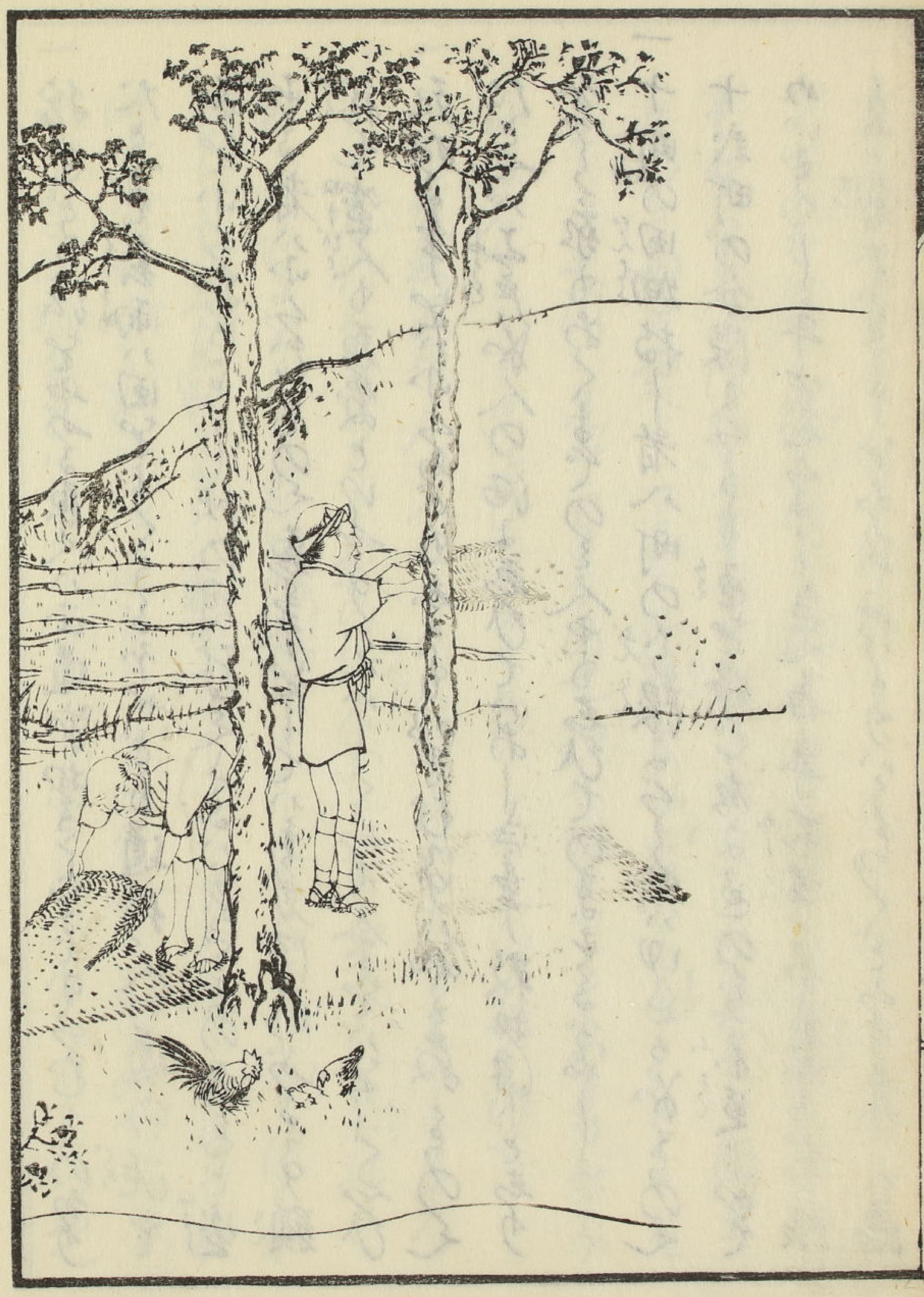
挙らく之江河をつくると銭千金を持しものハ悉つゝ一ツ乃
娘ゑべを持しものハなくつゐしと云り終によりて八千金も
一瓢(いつぺう)なり財宝(さいほう)を持し者火難(くわなん)水難(すいなん)一万の難に命をうし
なひし人世に多し

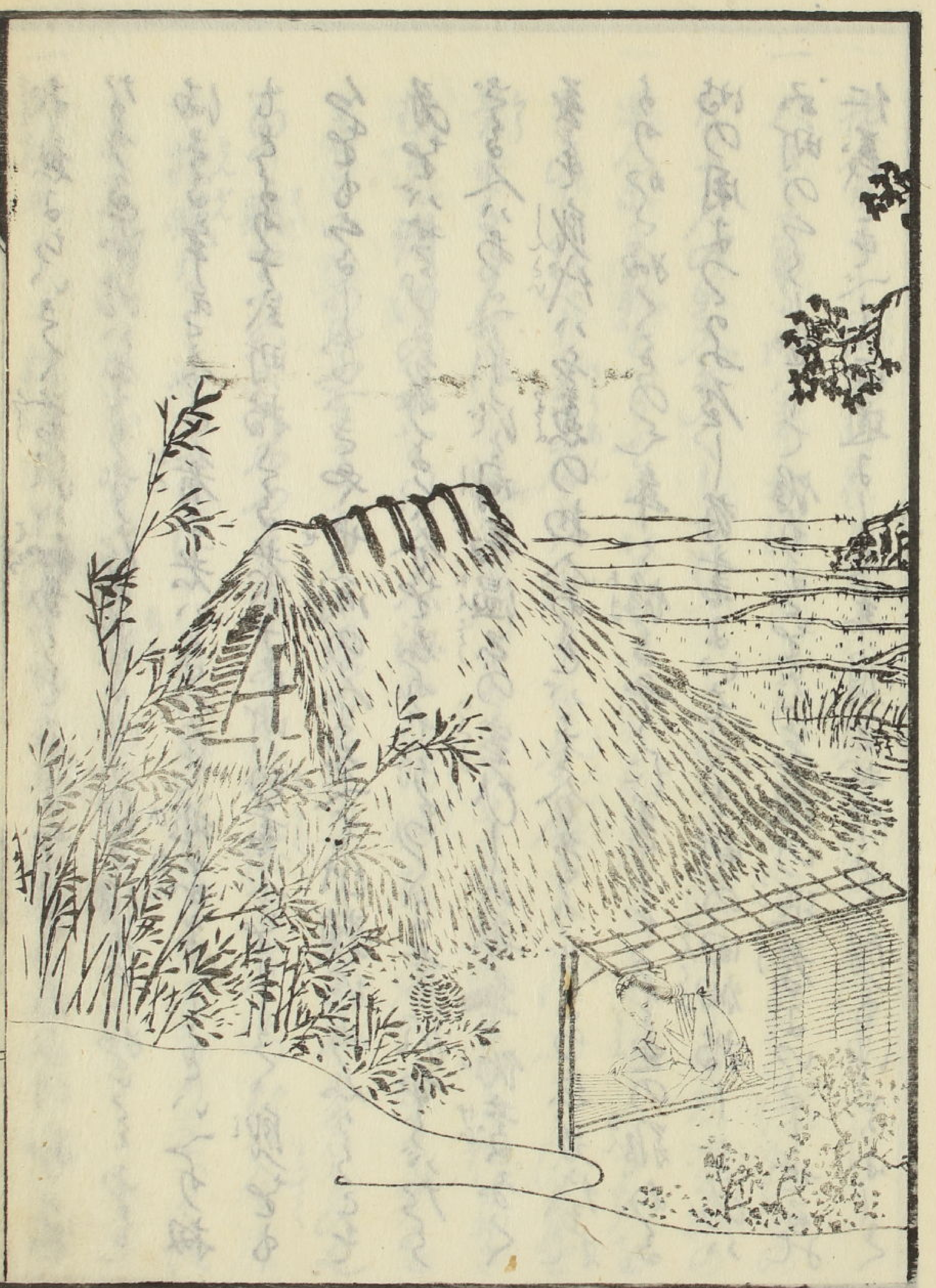
一 吉日にも悪をなせバ悪なり悪日なりとも善を修(しゆ)せバ
善なり善悪ハ人によりて日によらず吉日をゑらびて
おこなふ事末(すゑ)とわからぬ事この世に多しおやしきるなり
てらと寺にこの事ざりだその事しと世のつらきなる
といへり世(せ)るに往(これ)はいひ出すともなくさらぬくのこれ
いむ事なきものゝ浅説(せんせつ)なれバ真にのぼりしく
守るべし悪(おろか)なる者ハ小悪にさへつきて大善を失(うしな)ふ
ためのものなり

一 大願ある人ハ手近の事いとひ慎しみかくハ見ざる
ものゝ大行ハ細謹(さいきん)をかへりみずといふ事なり小事に
かゝはらずして大なる事をのぞむる人ハ大悪之河海(かかい)のおほきさる事ハ
細流(さいりう)をいとハぬ故也と知るべし

一 家業(かげう)ある時に貧(まづ)しきをあはれまず着(おご)りざれバ一生家業
あるものゝ分を忘れて色を好む事も用もなくおもびて
妻子(さいし)をも持どハし人中もあさどうることものなり始ハ家業を
いへども老くまづしき者あり或ハ始(そどめ)ことくして後威(い)
勢(せい)のうきる者あり元来(もとより)威勢なきものハ見へなりしく見ん
若(し)くものなり千丈(ぢやう)の堤(つゝみ)も蟻(あり)の穴よりくづるをとく
ひかゆるべし事なき誰も見へよろつればやがてかく月のいざ
よひの空(そら)や人の世なる事

一家居もやぶれたる所ハ修理をくハへ悪敷造る事をせバ一年
でももつべし障子なども破れたる紙なりを張かへ置し
道具ある人のほむる事なり家にあるつひ具足分限にあ
この外さき物を持べし一不二不能きものを家にも過たくさと見
えしハ之川て見にくきものゝ損せぬやうにとてあまりがたう
ぬも見ぐるしく只法ひへもなく物らうのよふに能きものゝ
一人の善悪をしらんと思ハヾその人のこのむ友を見べし子乃
よく孝行なるを見んぞ親の仁心なるを知るべし臣下のよく
君へ忠なるを見ぞ君の政道正しくして臣下を愛し給ふ
居しを知る直なるときハ影のまがらざるがごとく君まぐれ
バ臣もまぐるなり親仁道なれバ子も仁道にあるものゝ
一正しき政道なれバ世よく治り万民うるほひ多くして悦ぶ
様なれども法をやぶる悪人ハ正道に背きて我とからむものなり
たとへバ黒雨ハ田をよくうるほせども道行人ハ道の泥を
かなしむがごとし秋の月照さへたるハよきものなれど盗
まぬ者ハかなしむものゝ悪事をしてハ直に隠るゝ顔
然人も盗人も悪敷といふハかハしく知り命をバおしくおもひ
死ぬる事をバかなしめども志るもぬすむ事ハやまぬものゝ
たとへバ上戸の人の酒にゑひてハあしき事数かぎりしと志りながら
家もあくまでのむ人中も志ひてのまざるがなし
一十町の田畑持し者八町の分限にくらせバゆとりあるものゝ
十弐町の分限にくらし色を好む故に色の分不足となりて
めいわくし年中心ぐるしき毎年不足なれバ分限
おごりの事を志りて猶かくハうちくとくらすべし分限





老翁まちいさく蓄へハ損あらしも是よりてハ君子の恥る所
なかるべし時ハ皆なかずたらざる時ハむさぼりて如何なると
満ざる事なきまで着る者ハきハめて悲歎多しといへり扨
もとより十弐町持たる者ハ十五町の蓄しをしらく貯ども
人をもしるしむべきや世間の人ハなべて此類ひかんらこそ
身をバせなむるなりよく分を志りてうちつくに蓄へなバたら
ざる人ハあるべからず司馬温公の家ひしハ毎年餘蓄なく
蓄も所代ハ子孫の相入あるバこそ分量ならざる由志め代々れ
よりかかる如くをのこ年々餘るやうに蓄して不慮の難ある
時の用まつのふ屋し有書まいえく十町の田畑持しものハ
五町のくらしをして餘りをなぞ先祖の追孝まいたし世の為
仁義とをべし正道まして年月をおくらバ所もゆたかなしく

法人たよし積善の家とあらバ子孫も繁昌ま法ぐべし

一 大きなる蓄ある時ハ事おほくしてあるじの心まゆるぎ隙なきの
なかり人の出入多くしてむつかし金ま米穀多くきゆゑ盗賊の
用心まも気をつくる事かぎりなく貧窮にても事少なく家紀を
斈のしむべし草庵にハ居るとも金殿にて居るべからず家を
労せるにおほし海ハ百川よりあつむくきゆゑ大きなる徳を持き
むるに諸河の水を引く大海にハ増減なし川ハ流るる事を
売るさにハあやまちなきゆゑあれども不足なるハ萬やまきこその
富て財をつむハおやまちなき事多く智徳を身につむハ全し
て損減なしやいうによりきハ身を守る元となりこハく法
よきハまなびひをまでく郷とよとこの

一 人の元より一杯の酒を酒ても愚着ハかろくなりこのなかり

酒ハきつかひといへどもおくる人の志ハ浅からぬことなれバ一樽
をうしぬれバ恩ハもちろん謝しかりと偏にするをたのみなり一樽ハ
かへしぬれども志ハ謝しがたく紀事なき人ハかりしの恩をうけ
たりともまたかへしてたとへ大報なく謝すべきんをおもふべし恩を残
うけたく報せざるものハ大罪ある由忠理にしてハむくいかならず
未来までもうかむるといへり昔人むかひとなりをうらむる故
罪をつくるとも恩ハぞ恩をうけたく恩とわるハぬ之仁者ハ一日乃
まま君中も命をすつるといへり

一 人へ恩を施して徳を志く人ハ子孫繁栄にゆたくなし子孫の
さかへおとろへも先祖の善悪によるべしむかひまも遅速ある
ものなりされバ親の身にむくはひと残るハ子孫へむくふべし

一 恩をうけたく報せざるものハ盗賊人のごとし君子ハ礼のなきに

財をもて恩人ハ利徳の為に恩をすつるなり然して欲深此
病生あれバ何にせんとおもふんあてもなく生一生に欲ぬくのさき
ものハ貯おほけれバ志を損しおやまちを仕るものなり
お金をおほくいへる者ハ世上に殺多し智徳を得るものを
以て恩を報するものハまれなり

一 万の事十分なれバこぼるゝあと八分ハまざひ入といへり万の

一 食えてもにはいさぎよき事あれバ病おこる之所そのごとく
いさ紀よきハおのるあり後へおくりてやむハ久しくくるし
まさし病もおこりて後治せんとするよりなりよく慎せぐべしまた
ハひもおこりて後おさめんとするよりもつゝしんでよくつゝしむべし

一 人に徳をつみてもよふものハ天より幸をさづかる人に損亡
このあそこなひ出づるものにハ天よりまざハひをくだすといへり

まるも人へつゝきハ象身へつゝきがごとし我人をあつまるむる
つが身をあつまるむるに如べし
一まづハひハ西路の家に入事なしたとへバ利銭ハ無罪の人我
きらふざるがごとし福ハ邪悪の家に入事なし夕ゆへむ
日月の曲穴をてらさゞるがごとし
一象身のおし妃をいふ人あらバ是こそ我が師之といひて尊信し我
あやまりをいふもの有らバ是ハ象にあらずといひ志かぞくべし
象ハ事をいれもし是をよしといふ人ハ諂じつかてもせん
なしてら我をのハ必ず象あやまちをバのぞる由志あしきを
いふ人をバいむものぞ君子ハおやまちをかくさるすなくたやく
改るく非をなをもとゝいへもつてのはへ人にのぞむとやふん我
やめて我が智のたゝざる事をうまふべし人のいふ事也

合点ゆかぬをバうたがひをおこしてこれをしてとくと学バ
その理をくハしくさとる也大疑ハ大悟の本といへり
一芸の事に志まし信楽さんといふ八象のつゝるとをのミたとへバ十
事あらバ九ツをさしおきて一ツハのこし血気をやまるやく根性ハ
まづその事へうつりやすくして順々とたしかにものあり一度に
事をはくも我ハあきてこのまて大きに懈怠する故物の成就
なし人に物をならふるにも二ツ三ツおそかひその外信濟しけれバ
又順々におそかふべし一度に多くおしへ怒りバせざる前に先
事ふてる是するをのミ物を習ふ中もるさに別らんとする
まづをバきゝくおほかひと我くいつらんとやめをぞ先
ちゝきとのり習ふべしちゝきうきく一概にきゝきをなるさん
としてハその事必ずとゞかざるべし

一 大き成就ハ急にハならざるものなり 急にせんとするハ不如意の
もとひ也 悔恚なくかりそめにも毎日つとむる時ハ一生にハ諸人
おどろくほどの事をもなしとげ年を歴しぬるべし 纔ハ
芸術を学ち数年およぶとも石をうがつといへども月を
こゆるにてこそ大功もなるべきなり

一 人の大器なる修行を見てうらやみしきるなと随喜しさるハ
聞よくして志すも功徳を得べし また如何人ハ人のとみ
ても学ろくも軽賤しまたも大きになすをるなかなどとなり
あへていふべきものゝ志すをさまたげの人詞のとがめなくをさなきゆゑ
悲しいて詞をさゑぎりいひなきてつとむる事をバ好みするるなり
君子のきらふる不正道の事をなして好人まで害し又
何事にかよらずおよびてゆえしく善くいひ学せんく擬成就乃

事ハよろづにするやうにもなるものと見ハその功よりその
詞の色くるとりよべし

一 万事の好ハ強いてよき時にしてあしき時ハのぞし時節をまの
ものゝ病をまろ事死なる事のいついであしきとこそ待なし
生住異滅のうちもこの外なるハ識の水に及るがごとし志ざ
らくもやむ時なしたゞしとだんすをハきたんをまさに持を
えらばず善まじきする之持ぜしして志すも結うけるハ死後之
往ひよ行道とハの身にて知らずうて気の分とハ世ハさかしき

一 此世のもの行のんかなく死する人多くあるべし

一 人として礼なきものハ人がなかり又人よりも意恨を娘むるなり
あやも無礼もこの大なるをバ人のするさへ故よ人中にて恥のく
るま互しきさ共まんをのかりなきものハ必ちさきうまへひする

たしかとへバあすにのこる命のきはく定ざるをも悔こともあとせ
のむなしきをもしらずしてのぞまざる事をこのむがごとく好懈
おほくの家たし

一 人の上の善悪をバ誰も見れども身の上の非をバ見る人なし
飲食の上をこのんで見るを知て見る人といふべし飲食
ちのえやまひをもしらず仏が見ぬ悪をもしらず悪魔の
つくることをもしらず身の殺すをもしらず年の老ゆる
をもしらず病の身に侵し侵をもしらず死のちかきをも
しらず仏が後生の相続をもしらず浮世て人のそし

一 りをもしらぬ仏が身のゆうにつくることをしらバなんぞ身を
しりぞかざる又年も老ゆることをしらバなんぞ身をやすくその
らひて後生をもねがはざる後生相続ゆへとしらバ今より精

んをとかく志きりにたのまざる人も愛燈せざる人の所へ
志ぶかく立入て座に渡じるハ恥なり

一 物ごとにこざることの人ハ仏になるハおぼつかなしと思ひて志を止べく
さゞることの世に多し道を知らざるも花をながらく残
一 もとひ地に咲花を一枝をりて仏に備るハやさし志ハ
千連にかもつ紀すをおほくて燈をとらずして仏に備かし重
大功徳を得ることあるし ひかり貧女が一燈ハ長者の万燈
よりも功徳つよきなど志るべし くゆうハ貧福によるべから
ず志の有無によるべし

一 悪と志らバまづうかりともなすべからず小悪をいやうハぬ
ものハ必ず大悪へうつりやすく重とへバ一銭の勝負を見い
まづらぬとそまるものハ後ハ万銭の勝負をもするがごとし

一悪をなすものハ必ず万悪をよび家のみにあらず人までもくならん事を願ふもの也
一老川うたに云へる色かし方の法ひへまちかせしハ日をしきものなれバ十年かゝりして日十九年比非ハ知るといへどもいまださきかに末の身持をかなさんとする人なし是をひかなしきなりとも日暮く店をいそぐがたとく年月をまでませねまもりてまたき時は気をつきて老く将梅なき事に身をぞ損ずべし落花枝にかへらざるがごとく老身またきにかへる事なし押ぞるべき事之
一百行ハ堪忍をもるを第一とするなりよく是へたのぞされ法行うつるすれしとこのく禍ぞよくたのぞされバ成就せざるとなり世るの事なとこのんかんうまきき入有

あしき朋友とまじはるよりよくこのんでなるれバまじはりさぐる屋し夫婦むつびよこのんでなるれバ家みだるゝ
一子を育し子とめをのこ兄弟このんでしたしまれバ必ず争居を屋し悪人悪事かくこのんでほしくものなれた悪す小ハほしくものなれし灸のおつきさくへ志のびてやく時ハ病を治し戒行もよくまもりたもちぬるバさとりをうるる悪人よりよき人を悪にする時よき人もうらへぞしらくいたずら悪人とこのはる事なしよく堪忍をまもるを智恵といふなりこのまハざるれバ悪人まよりをうしなふものなりたとへば天よりむかく雲をそくまこなうよあるもののなきも恩之川くその色が身へおいるがごとし悪口をそこふる時そまづひよやまぞして志んねの火さらん

とがる處しこの事ハさればその川うしきものなかり
人の悪口ハ火をふきこのむるがごとしこゝろある八節(こきび)まことと
あらバ想しくんをだこゝろあるまさりくぬやうに
揖尾し一切のち念んを託稱くをさえぬをバ一切の
悪事んをまさりる事なしんの智慮(ちゑ)せずとき無念にて孫へ
そのがさかるなり

一 富(とみ)る時ハんれおしいまだ無念法をつくるり多し魚肉(ぎよにく)
をつる〇によるひ鶩樂(ぶがく)に差し六塵(ぢん)にまよふ事も皆多様あれこと
ある書にハ財の多きほどつゆをまに〇くるゝも又多しといへる

一 金をたくはんで子孫へ無川るにハきハめくらうしおさその為めにすり
胴(こだ)をゆくゝ数(をし)るに守る事ありし共日々に陰徳(ゐんとく)をつまさる
の子孫によく殉(のと)めて長久にまさかるる抜陰徳といへるハ

正直にしくく人へ慈悲(じひ)をほどこしもろもろの事ニ陰徳(いんとく)を積
たのむハ殺逆(さつぎやく)ハ福力(ふくりき)ハみえ〇ども子孫へむくひ又来世(らいせ)へ
むくふべし草木をいへバこのとある本にも〇をまく時實(こ)ハとう
まて〇ども末そろふる味實をとるがごとし正直にして
陰徳をつむ若き者がよハく見え一旦(いつえん)ハ悪人にかはる
ふることの有れども諸天のあいれをみて無念に法ねにハ
勝とあることの悪人ハ当分ハ威勢(おせい)つよく邪(よこしま)をゆく
無をやぶる無念一旦(え)ハ勝にえあれども後ハあと戻くある
ぶるなきをいへバ蓋(そ)ハこれまでその有れどもこの無蔵るなり
みて年齢(よる)までハつゐせまらざる無念諸人がくるるを
右(あく)ハやうらゆく蓋(そ)にかあれてハつゐ一旦ハまらんとも
法ねに無ふる事なくして法ぐくがごとし

一 いづれ宗祖の書にいはく人ハ縁起の事を先習ひてその外の
事をバ次に習ふべし世間のまなびハ習ひても更にたらず
あれど縁起のみ習ひて更に知らぬ人あらんや扨縁起を
習ふといふハ善果悪果を知らんとてつくづくつとむる事たとへバ
うまれ出る身の何からより切てもらひきたる事へゆへを
尋ぬるごとく日比善なれバ縁起の時善の方へ赴むく也
又いはく我が門弟達ハいと殊に押しこめ祖ハ称名をもつて
仏道を修むべし一生むなしく過ごしても一万劫ふる事
なかれ大悲ある人の電光朝露のはかなく我此身ハ
為に善の苦に至る事ハ悲しきなることぞや又いはく
生をうくる人百業まで生ずるとも生滅の理を悟りて仏に
なる仁義なりともあらぬ事の八一日いきて理を知り

生るる人の中にて百千万をまたとよめり
一 皆人子に対し実に報き身をつくひ生るるものを悲しく
利をもとめ人をむさぼりて欲をなし妻子等の為に
日夜罪業をつくる事浅ましきことなるぞやさて年く
募りく積まうける事とそれハ年の老ぬると死に臨
むとの二ツなりその来る事もみやうがなりとしわがみの
身にとを行く積業をはなすべしそれ未だ追ひのひ丈夫なれバ此
無常を忘れて名利にほだされ死のちかきを知らざるの
一 天竺にある大王ハ老いての後国を捨てて冥途よりの一義此
つひ来るとおもひき身をのごとくに世を遁世しおひたるとて
扨しらぬ事まなこの道を尊き事へぞ知らひよ志ハ如く叢
あきこの骨腰いてむなどハ皆めいどよりのつかひといへり

又五臓にきくなり気腸中なる虫気をのぞきもどし機根
よハく徳行つゞきがたし たとへバ人ハいづれも此理におど
行ひがたきハなし愚鈍なるものハなかなか迷ひにまよひよくわどろ
かせけ出を苦労とおもひて年月のくのれしき事をせむ
家をたのり因果つてなくしらく苦労せまへぬと思ひ人をそばら
やこそ福を行来よ何とれく渡世の見るなかく年の分世も
まちかえてよろせざらしもこのつとめとハちがひみるしき事
のなく渡らるる也何かにも善報のいはしく見る人もその身になすそ
れんぞ若の前ときのハ是へかへらば前より見き事の思をかへし
世の中ハひんやもくて住人も影し
一 愚種なる親なりともよく志がなずる子の孝行を志つるまに諸人
年寄のくる親をバないがしろくいはの事をも思ひせ

万よきもいとせ親の跡をあ家をつぐをあらハちもやうら数
多くしまうともなりそれの不幸をとねらしこの時ハ父つて
親先祖をもうらむるものぞ親を不孝せしものハ天然の
因果めぐり又家子に不孝せらるゝものぞ父ハ父たりとも子たる
子ハ子の道をはしらざるが御恩
一 諸人未来を抛ちもよしなく渡世なさにし渡世なくしたく
悪業へおちるならバその船のなかきハいくたびくなりらんある書に
いはく人の心れ満ちたる福の煩とし親をさむる道ハ親あらず
なぜ巣をはくらんと思ひて親るになるバちちまもとくる
親もくなかれくと親るもをぞ娑婆にまとへ親をバめいどに
ちきとかるえ又是をとへをとなすていそぐ毒のこゝろをまるをなるたゞ
今悪を抛れぬしくはいるハ毒を抛れずして食ふがごとし

一世上の人楽(らく)をせんと思ふ心ゟ金銀に欲(よく)出てそこなく身残
くるしむるものを名利の念(ねん)をやめて着(ぢやく)をはなれものしを
生活じきと思ひていそがしき時ハ身もやすく人中もさわがしき
なくしてこの人りくまものしことなるものゝ十欲ハつゝひやすく
一浅ハことなるべし求(もと)めて死欲をでとあんとく且暮(くんが)苦(く)
患(じん)をなしつゝひやすき顛例(てんどう)の楽(らく)をこのまんや八苦(ちく)の去へ
生まれて楽をせんと思ひても行ひハ身の楽するべきさえなり禅悪(ぜんを)の
あやむなれバ清浄(しやうじやう)を称ひてもきゝめきるハ一つもなし
一生の内安楽(あんらく)して金銀をたくはへるものハ天の福報(さうわう)なり流
なまへんとなど久しく続きく後の子孫ハ恵の巡礼義(ぎ)
よのうも積おさ然しとても身をくるしめバ名利の世ハ
くるしめぞ生死をまぬかるゝにまさるべし

一手足のつてまわをバ人なとまわつくべと思ひてなまくえんの人は
及バざるをバなげく人なしかくちハこゝをこのくもわまんのなる
ことにおしくまし眉目(みめ)かたちハ生れつきなれバなげきてもせん
なし心ハなをせバなほるものなれバ古代の人此事もんの賢(けん)
愚(ぐ)をバしるせどもかたちのよしあしをバ書のせず
一先人のあ経かる物をバ塗避(どさい)せずしくつゞくべしこれも礼にかなふ
又下のかのこへの葉りをのハかろき物をつかふをよしとすべし
一百病ハ気のめぐるといへども筆とこゝろある時ハ血(ち)もめぐらぬ人の
心ハ愚痴(ぐち)にも忍苦(く)にもなましきをも苦しまづらのみぞ
了簡(りやうけん)しつ補く気をつむるものゝ持ちまで来べき事も
あさかに苦(く)にまする時ハ速く気虚(きよ)しくもでころなり百病おこり
て治を治しがたく死するものさへその事をまさになり

つとめてみれバ若かりしほどハいとやすき小事ことゝ思ふ年寄人に
なる事也是娘ハまづかのすがたといへる浅き百万の金なりとも
かへがたき命をすてし事かんにんならぬ故なれバ命ハ百万の金
にもかへがたしと思ひてよく〱捨べし命とくらべてハいかなる宝も
なきもの也さもしき人ハ命ほど大事なるものハなし命をすてることのまれなれバ
世界に若男なし一方におどろく時ハむなさわぎして気を失ひ
なれバ一心をさだめて命を捨られぬなれどなまじいハむなさわぎせぬ事
なし又命ハ惜き事なれども仮程のきハまりしなるバなの事くハ
愚痴の者ハ命をなげきのまゝなれバ気をうつしめぐりして志ありも
其命之命を大切に思ひていろ〱の苦労をする内にも命を
うしなふ事あり泰山崩るとも目もまどろむ心も動せぬ
ほどに志し常に気をやしなぬやうにするが第一の養生也

一 人間の世事多き中にもよく文道に入しよりは意味ふかきを
なし是迄の大事とも一度学問に入て是まで志さん人行ぬれ
まざかなくも捨べきなきわんや其外をかへバ一日にも小分の程を
わざを勤る者も是を第一と思へども得に大分の利あるべく
稼ぬれバ右のわざをそぞはつのごとく思ひ捨ゑ紀がごとし

一 経論をよんでもなくむる時ハ功徳を得そしる時ハ罪を受ると
なりされバ大工のきざみの〇ハ木の曲りを直さるか間か此
書籍ハ人の迷をなほさんためのなくこの〇なくても木の曲を直さず
されバ何の益かある書籍をよんでも讀ぐんでなすべき道ハ
何の詮なるべきや用ると捨るとハ得失その違ひ一文ハ無文の
師といふ文書をよんで紹介事なる書をバ広く覚えても
身の行ひをなさざる者也是ハ世のことをまなびに論語よみの

論語なりといふべし經書の理にかなへる詞經意にかな
はずば録して信ずべしとて何程の悪人にてもよき一言ハ取
事なり何事も是を是とせむ事とすべし
一 愚なる親といふとも其教訓に背きて天道なれバ背くべからず
て十に八九ハ親の詞は子の為に道理に叶ふことゝ思ふべし
いかにぞとなれバ親の子を思ふまことより悪きことをするをもゆるさず
あれど日夜思ひつゞくる故なるべし其深切の実より出るなれば
心ある教訓なるべし一言半句も子の為にあしき道理ある
べきやうなし万に心つけ僻言ありとも親の詞とつゝしみて
聞るべしかくて道を憐愍給はざらんや神仏の恵もありなん
僻言も主に善言と同じく身の為にならぬべし万年の寿を延べし
千金の寿に勝るとも親をおろそかにし志に背く人ハ寿を保ち

家を治る事ハ安くして国家を治るも是に同じ事を忘るべ
からず我人蒼生ハいつまでもかく勤むべしと愚人ハ聞べし小
一箇の親を以て善を行ふべし
孝をなす親を親と思ひなバ世にむづかしき人といはるゝとも
何の子細もむつかしきことも唯親の子をあはれむやうに
日夜心にうけて親の事を忘れざるが孝行の中にもわけて親ある
事を忘却して其身一箇のためにも思ひ氣儘に働く振舞
万の濁りハ其身に見えぬ或貴人の法則に親を火の元ハ萬端心に
うけて藩来に恵べからずと謹むべき言葉ぞとくまひしべし

子孫寶草終

画工　南江八尾貞

彫工　遠藤儀兵衛

玉

東京府淺草區
北松山町廿七番所有地
眞宗書林玉文堂珠水屋
伊藤清九郎
但シ眞宗大谷派本願寺
表御門前通菊屋橋ヨリ
壹丁餘西エ入北側

たまみづや

紙貝撿査済